

小牧石堂遺跡発掘調査報告書



麻 生 町
小牧石堂遺跡発掘調査会

目 次

発刊のことば	麻生町長 小沼 幸藏	2
序	麻生町教育長 荒張 坦	3
第1章 調査経過		5
第2章 遺跡の環境		7
第3章 発掘調査された遺構遺物		13
第1号住居址		32
第2号住居址		41
第3号住居址		45
第4号住居址		53
第5号住居址		57
第6号住居址		68
第7号住居址		76
第8号住居址（省略）		76

発刊のことば

麻生町は北西に筑波の山なみを臨み、霞ヶ浦と北浦の二大湖の間にあって、複雑に入り組んだ水田と行方台地によって形成され、緑豊かな田園地帯であるが、原始時代からの自然の姿を非常によく残しております。

貝塚・古墳群や城跡等も多く、古い文化と自然環境に恵まれた素晴らしい大地がありました。

本町も鹿島臨海工業地帯の後背地として、その影響をかなり受けており、又激変する時代の波により様相を徐々に変えつつあるその中で、近代化への指向がますます高まりつつあり、教育についてもその熱意は誠に素晴らしいものがあります。

町もこのような情勢に鑑み、教育の将来性を洞察し、教育最優先の施策を講じておりますが、この度大和第一小学校の永久校舎建築の運びとなり、隣接する北浦を一望する風光明媚な景勝地小牧台地に移転新築することになったが、この地は千古の歴史をもち縄文散布地と小貝塚があるので、埋蔵文化財保護と古代史的考証より発掘調査を実施し、郷土の原始時代の姿を科学的に究明するものであります。幸いにも東京教育大学講師丸子亘先生を調査主任として、信憑性の高い発掘調査研究が終了し、報告書が発刊されましたことは、誠にご同慶にたえないところであります。

丸子先生はじめ、関係各位に対し衷心より厚く敬意を表するものであります。
今後本町発展のため、この報告書が有効にご活用いただければ幸甚に存じます。

最後に関係各位のご多幸とご発展を祈念し意は尽しませんがお礼のことばにかえさせていただきます。

昭和 53 年 3 月

麻生町長 小沼 幸藏

序

麻生町小牧石堂（麻生町立大和第一小学校地）遺跡調査発掘に至るまでの過程の概要を述べて序に代えることにします。

本町は昭和30年3月、旧5ヶ町村が合併、新生大麻生町が誕生したのであるが、その当初から町は一つの目標に教育の振興充実が挙げられ、その手はじめの大事業として、5中学校を統合し、施設設備の充実が一通り終ったのが昭和46年でした。

これにより管内小・中学校の格差は頗る著しくなり47年からは小学校の格差是正を旗印にこの条件整備に全力を傾け、特に51年度の如きはこの最たるもので町費一般総予算の51%の巨費を小学校校舎の改築・諸施設設備に投入するという全力投球の本当にありがたい姿がありました。

その一環として大和第一小学校はすべて木造校舎であり、その3分の1は老朽危険校舎でこれの解消は町として急務中の急務であるがこれと併わせて校庭運動場は創立以来殆ど拡張もせず甚だ狭隘であるところから新校舎建設と校地の拡張を一体的に解決する方針を立て、49年度から着手、地区議員、区長各位の絶大なるご協力とご尽力により八方努力、二転、三転、糾余曲折の末、関係各位の日夜に亘る奔走により小牧石堂台地の風光明媚な学校環境として、最適地が内定、町としては直ちに関係者の案内説明を受けて、現地の実地調査をしたところ、意外にもここが繩文時代の遺跡・貝塚等遺構があり、文化財として貴重なる存在であることを発見したのである。

ここに於いて直ちに、県教委に事の次第を連絡、文化課の数回に亘る現地実地調査・指導・助言により文化財保存の方法につき協議 15,000 m²の校地予定地の1部2ヶ所、約2,000 m²を発掘調査し、その結果を報告書にまとめ、記録保存する一方、大部分の残校地はすべて1m以上履土、土盛して地下埋蔵保存する方法をとることになり、その具体的方法・手続と予算措置等を講ずることにした。この間県文化課の親身も及ばぬ指導・助言数度に亘る現地指導調査には感謝の外ありません。

貴重なる埋蔵文化財の現存する小牧石堂台地が大和一小新校地予定地としての保存方法の見通しがほぼついたので町としては麻生町小牧石堂遺跡発掘調査会を結成し、規約・予算600万円（内7割は人件費）の審議・役員の選出・調査主任の委嘱等を審議・決定・発

足を見たので、51年11月文化庁長官宛発掘着手届書の提出等、事前の諸手続きを完了、調査主任として文化課の助言を得て、東京教育大講師丸子宣先生の委嘱を終り、丸子先生と十二分の打合せを了し、51年12月13日から現地の調査発掘作業を開始、約4ヶ月の日数と延べ600有余人の作業員を動員、予定の発掘調査を終了、昭和52年5月以降、出土品の整理、報告書の作成準備等々を終り、今回待望の報告書の発行と共に文化庁等関係方面への報告書提出最終段階に入り本発掘調査会の任務も完了することは文化財保存の立場から誠に喜びに堪えません。

この間、大和地区議員諸公、区長各位、丸子調査主任先生ご指導のもと酷寒の最中心よく発掘作業に協力従事下さった小牧地区の皆さん、更には最初から報告書発行まで文字通り終始一貫指導、助言、鞭撻下さった県教委文化課関係の諸先生方に万能の感謝の意を表して序文とします。

昭和53年3月

麻生町教育委員会教育長 荒 張 坦

第 1 章 調 査 経 過

1 調査にいたるまでの経過

麻生町立大和第一小学校は、県道麻生鉢田線の小牧から竜田にかけての丘陵地帯の中腹にあり、木造校舎が老朽化して来た。

同校地は狭長で崖崩れの危険もあり、かつて校舎増築のとき傾斜面にかかる貝塚を削り取ったことも記憶されているので、現校地の再利用は考えものである。

新校地に鉄筋コンクリート造校舎を新築して移転する計画が立てられ、学区内の適地が捜された。

教育環境として望ましい風光明媚な丘陵上で 15,000 m²以上まとまった土地は求められず、候補地は二転、三転して現在の同校から東に見える宮平の丘陵上の平坦部が最優秀候補地と決定した。

ところが候補地の畠地の一部の平坦部から傾斜部には貝殻が散布し、縄文土器片・土師器片の散布が認められ、埋蔵文化財包蔵地である疑いが地元有識者から指摘された。

茨城県教育庁文化課の指導によって埋蔵文化財は現状のまま保存しておくことができなければ、発掘調査をして「記録によって保存する。」こともできることがわかった。

茨城県教育庁文化課の依頼を受けた筆者は課長補佐関昭次氏・同課員大塚博氏と共に、現地を視察した。

貝塚は台地上の西傾斜面に 20m × 15m 程ある小さな貝塚であり、土器片の散布はまばらである。ボーリング調査の結果では表土の黒土層は 60cm 以上あるから、貝塚部分のみを発掘調査すれば、他は校庭下になるので手をつけなくてもよかろう。ただ校舎敷地となる部分については集落の存在も考えられるので発掘調査する必要があろうと考えられた。

麻生町の小沼幸藏町長・根本定助役・根本清収入役・平山啓総務課長・荒張坦教育長と県教育庁文化課大塚博氏と次の通り協議された。

(1) 学校建設にあたっては、極力遺跡の保存に努力する。

① ローム面は地表下 65~70cm である。したがって整地に際して表土削平は、地表下

20cmまでとし、土量不足分は他から運搬して盛土とする。

- ② 発掘調査を実施する部分は、最小面積とする。

ア、校舎建設予定地 1,000 m²

イ、貝塚の部分 300 m²

- ③ 発掘調査を実施した場所以外のところについては、遺構の破壊となる行為は行わない。

- ④ 学校建設にあたっては、将来とも遺跡を保存するよう建設計画をたてる。

② 調査体制

- ① 町教育委員会が責任をもって組織する。

- ② 調査主任には丸子があたる。（以下略）

「麻生町小牧石堂遺跡発掘調査会」が発足し、小沼幸蔵町長が会長になった。

第 2 章 遺 跡 の 環 境

1 地理的・歴史的環境

茨城県行方郡麻生町は、北浦と霞ヶ浦に挟まれた標高30m前方の行方（なめかた）台地とそれに複雑に入り込む樹林状の谷およびそこから流れ出る蔵川などの小河川にそった水田地帯とからなっている。

行方台地を形成する地層は成田層であって、その層中からはしばしば数万年前に棲息していたといわれるナウマン象の化石をはじめ貝化石が出土している。成田層の上部には関東ローム層といわれる黄色の火山灰層が1～4m堆積している。その上部に0.3～0.4mないし0.7～0.8mの耕作土が被覆している。

北浦と霞ヶ浦に接したこの地方は気候も比較的温暖で、風光明媚な自然環境に恵まれている。この環境は数千年前の貝塚の営なまれた時代から古墳時代を経て今日にいたるまではほとんど変化することなく継続して来たものであろうと考えられた。

この小牧石堂遺跡付近は、北浦の終る鉢田町から北浦村・麻生町・牛堀町・潮来町にかけて無数の縄文時代から古墳時代にいたる遺跡が存在している。

今回発掘された小牧石堂遺跡は、麻生町の北部にあたり、鉢田町から麻生町を経て潮来町に通ずる県道繁昌潮来線の籠田の台地から小牧に下る切通しの脇に存在する。この道は籠田街道といわれ、東の台地上の尾根部を本遺跡の中央を貫通していたのであるが、昭和初期の不景気の時代に現在のように切通しとしたというところである。

『茨城県遺跡地名表』によれば、縄文時代の遺跡として小牧第一貝塚・同第二貝塚および井久保貝塚が紹介されている。

小牧第一貝塚は麻生町小牧462の1番地の大和第一小学校の裏側にあたる丘陵の裾部に混土貝層の露出があり、土器片が散布している。

小牧第二貝塚は麻生町小牧285番地にあり、現在は普門寺の裏側の丘陵斜部の山林中に多くの貝殻の散布が認められる。

井久保貝塚は麻生町大字小牧小字井久保263番地にあり、台地上のきりくずされた部分に貝層がみられる。貝層の厚さは0.5m以上あるようである。

これらの3個所の貝塚は台地の上面、中腹・裾部であるが、一直線に並んでいるとい

われている。

いずれも縄文中期を主体とする主淡貝塚である。

今回調査された小牧石堂遺跡は麻生町大字小牧小字石堂 265・266 番地にあたり、丘陵上の西緩傾斜面に存在する。

さらに調査中に、本遺跡の東北方約 100 m の小字石堂 135・136 番地の丘陵上の北緩傾斜面に小貝塚を発見した。3 m × 5 m ほどの貝殻散布が 2 箇所見られる小貝塚である。

これら 5 個の貝塚は台地上の緩傾斜面から中復と裾部とにあり、東向、西向、南向、西向、北向とあり、いわゆる両面貝塚といわれるものであろう。

付近に目を転じてみると、北方の籠田には台地上の籠田貝塚があり、さらに北浦村繁昌にいたる間には山津平貝塚及び鬼起の森戸貝塚が発見されている。また南方の岡には丘陵上に広範に散布する岡平貝塚があり、さらに南方の根小屋には台地上の畑に根小屋貝塚がある。

潮来町には大賀貝塚・ハザマ貝塚・築地貝塚なども所在している。

行方台地はこのように多数の貝塚が分布しているが、いずれも小規模なものであることが特徴であるといえる。貝塚にともなう集落址の発掘調査されたものはないが、貝塚周辺の畑や山林中に土器などの散布があるので、小規模な集落が存在しているのであろう。

水田農耕の普及した弥生時代の遺跡としては、大麻遺跡・堀之内台遺跡・はなれや遺跡などが知られている。

大麻遺跡は、大字麻生小字田町にあり、標高 30 m の台地上の大麻神社の南東約 50 m ほどの畑であるが、弥生集落と考えられる。

堀之内台遺跡は、大字小高にあり、標高 34 m の台地上で、小高小学校の東方約 300 m ほどの畑地に弥生式土器片が散布している。

はなれや遺跡は、大字島並小字はなれやにあり、松兼池を臨む台地上の支端にあり、弥生式土器の散布がある。

弥生時代の遺跡は現在 3ヶ所知られているが、いずれも台地上であり、今後の分布調査等により、弥生時代の遺跡がより多く発見されるであろう。

本遺跡からも器台などが発見された。

古墳時代の遺跡としては古墳群と散布地が多い。古墳群は北浦側だけでも籠田の籠田

古墳群・藏川の権現山古墳群・大塚古墳・根小屋の根小屋古墳群・矢幡の瓢箪塚古墳・白浜の於山古墳などが知られている。土師器・須恵器の散布地には岡の岡平貝塚に続く台地上をはじめ、新原のわらび台遺跡・麻生のまいだわら遺跡・あまざつみ遺跡・飯岡の飯岡遺跡・南塙の塙遺跡・島並の宿遺跡・薬師堂遺跡・こきど遺跡などが判明している。特に岡平遺跡は『常陸風土記』にある岡の宮とされている処であるから重要である。なお本町内の主要遺跡のうち『茨城県遺跡地名表』に掲載されているものは次のとおりである。（麻生町の地図10頁参照）



1 : 25,000



第1表 麻生町遺跡地名表

通し番号	町番号	名称	所在地	種別	地目	遺物	備考
1313	1	小牧第一貝塚	小牧 462の1	貝塚	山林	縄文式土器(中期)	
1314	2	小牧第二貝塚	小牧 285	"	宅地	" ("")	
1315	3	井久保貝塚	小牧井久保 263	"	山林	" ("")	
1316	4	大塚古墳	藏川 535	古墳	畑	人物埴輪(男子,女子) 円筒埴輪	
1317	5	瓢箪塚古墳群	藏川原口 600	古墳群	山林		前方後円墳1 円墳3
1318	6	岡平貝塚	岡 571	貝塚	宅地	縄文式土器 (前・中期)	
1319	7	權現山古墳群	蕨川權現 265	古墳群	山林		前方後円墳6 円墳12
1320	8	於山古墳	白浜於山	古墳	"		
1321	9	瓢箪塚古墳	矢幡 横須賀 567	"	宅地	直刀	
1322	10	熊野神社貝塚	石神 熊野神社 755	貝塚	畑		
1323	11	根小屋古墳群	根小屋 227	古墳群	山林		前方後円墳1 円墳4
1324	12	根小屋城跡	根小屋 242の1	城跡	"		
1325	13	おおじ庵	白浜 114	寺院跡	墓地	五輪塔1宝篋印塔1	
1326	14	麻生城跡	麻生要害	城跡	宅地		
1327	15	矢幡城跡	麻生町行方	"	"		
1328	16	島並城跡	島並登城	"	墓地		
1329	17	大麻貝塚	麻生田町	貝塚	畑	弥生式土器	
1330	18	公事塚古墳群	小高公事塚	古墳群	山林		円墳3 前方後円墳1
1331	19	於下貝塚	於下	貝塚	畑	縄文式土器(中期)	
1332	20	井貝遺跡	井貝	集落跡	"	" (晚期)	
1333	21	堀越貝塚	小高堀越	貝塚	"		

通し番号	町番号	名 称	所在 地	種 別	地 目	遺 物	備 考
1334	22	島 並 貝 塚	島 並	貝 塚	烟	繩文式土器(後期)	
1335	23	堀ノ内台遺跡	小 高	集落跡	"	弥生式土器	
1336	24	小 高 城 跡	"	城 跡	山林 烟		
1337	25	大 麻 古 墳 群	麻生田町	古墳群	山林		円墳 2
1338	26	大 門 貝 塚	富田大門	貝 塚	烟	須恵器	
1339	27	茶臼山古墳	行 方	古 墳	宅地	直 刀	主体部湮滅
1340	28	南山古墳群	小高南山	古墳群	山林	"	前方後円墳 2 円 墳 7
1341	29	富 田 古 墳 群	富 田	"	"		前方後円墳 1 円 墳 4
1342	30	コシマキ山古墳	小高福岡 631	古 墳	烟		前方後円墳
1343	31	大 塚 古 墳	小高大塚 1311の2	"	"	埴 輪	方墳
1344	32	中 城 跡	麻生町行方	城 跡	"		
1345	33	籠 田 貝 塚	籠 田	貝 塚	"		
1346	34	台 宿 貝 塚	台宿寺付近台上	"	"	土師器	
1347	35	矢 津 貝 塚	今宿矢津	"	"	"	
1348	36	太 田 八幡 貝 塚	矢幡薬師台	"	"	繩文式土器(中期)	

第3章 発掘調査された遺構・遺物

1 遺跡の概要

小牧石堂遺跡は、A地区（校舎建設予定地）、B地区（中世塚付近）、C地区（貝塚）の3地区に分かれている。調査はA、C、Bの順に行なった。

A地区（11m × 100m）を調査した結果、中央西側より住居址が9基と土壙が2基、東側からは土壙が6基と用途不明の遺構が2基の計19基の遺構が確認された。これは台地が西方に伸びているため住居部分であり、東側はA地区東端部で谷に入っているため、住居址は営まれず、土壙が掘られたことによるだろう。また、第1号遺構・第9号遺構・第14号遺構の部分に自然の落ち込み（谷）が入っている。

出土遺物は住居址よりツボ、カメ、壺、コシキ、須恵器の壺と長首壺の頸部片などが検出されている。時期は国分期と比定される。また、土壙内からは、縄文中期加曾利E式に比定される土器片が若干検出されたのみである。

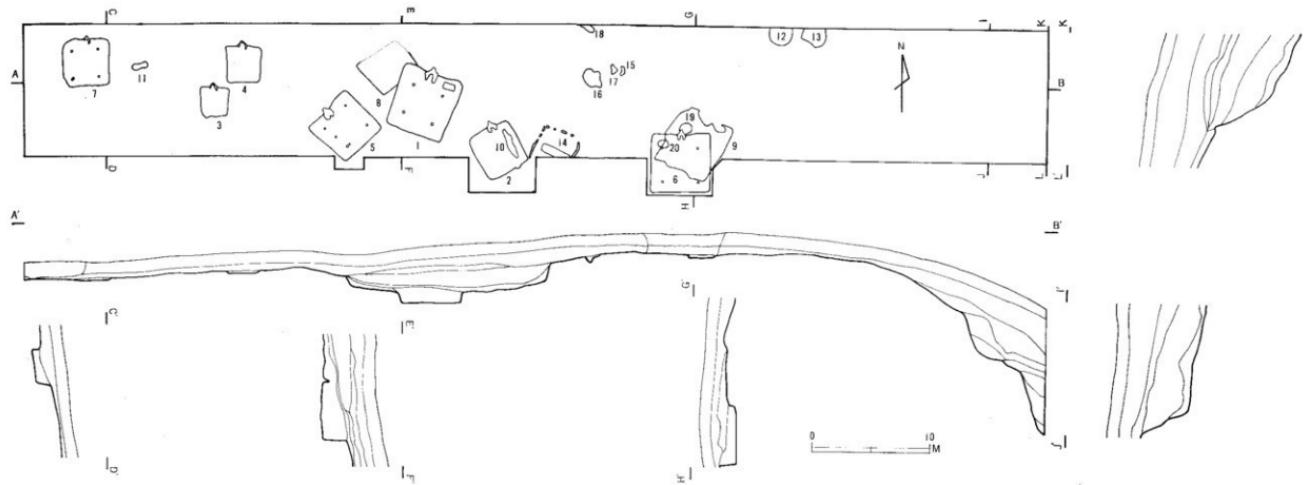
B地区は、底径270.0cm、高さ130.0cmで、不整橢円形を呈する小さな塚を中心とした地区である。この塚を中心として、東西・南北に各1本計2本のGをT状に設定し調査を行った。塚は以前数mの円形を呈していたという。現在は前述のような状況であり、北東部に石が露出していた。調査の結果、長さ100.0cm、幅90.0cm、厚さ0.05cmで縁泥片岩製の板碑（無紀年碑）が検出され、土層は表土、明褐色土（盛土）である。また、塚の周辺から周濠と思われる遺構は確認されなかった。したがってこの塚は、板碑が検出されたのみであり、周濠も確認されなかったため、古墳ではなく、供養塚と判断される。また、24g側のT（南北）からは、遺構は確認されず、5G、6GにかけてのT（東西）からは、T西部において住居址と思われる落ち込みが確認され、塚の南東に設定したTからは、T中央部と南東端に住居址と思われる遺構が全部で3ヶ所確認された。しかし、このB地区は、当初調査区域外の為、塚の調査が中心であり、他の区域は確認調査である。出土遺物は、遺構内から土師器壺（完形）が検出された。

C地区は、本遺跡を有する台地の西端に位置している。西端は開墾による土取りがあり、一部破壊されている。貝塚の範囲は、東西20.0m、南北27.0m、深さ1.80mある。貝層は、表土下の第1純貝層、混土貝層、第2純貝層、混土貝層となり地山に至る。貝

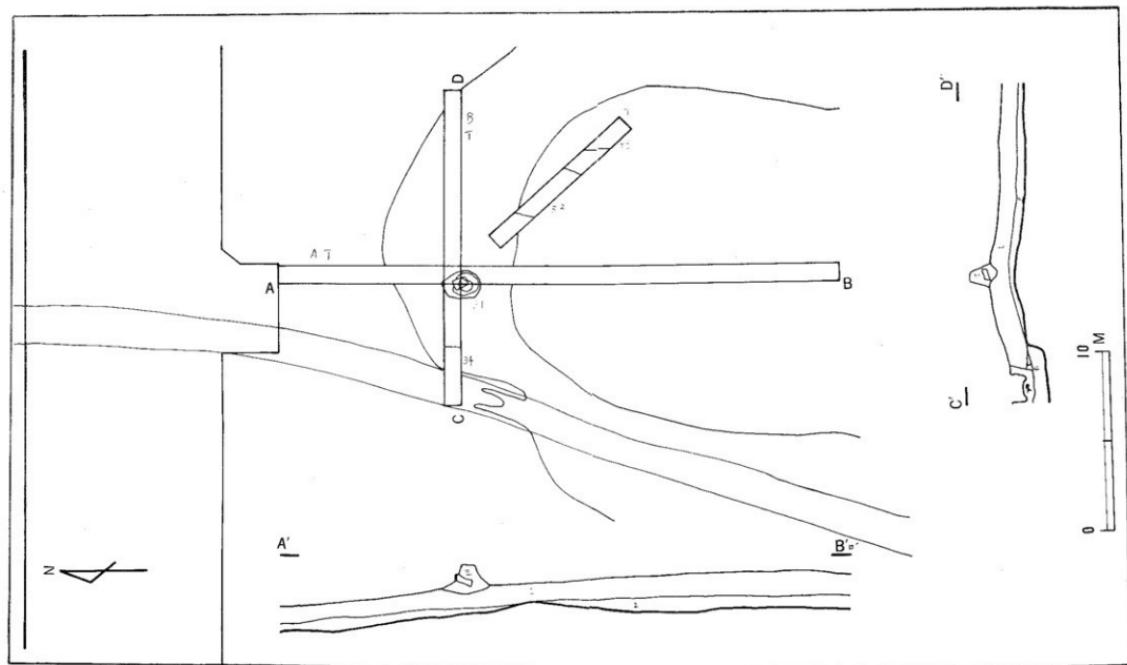
はアサリ、ハマグリ、シジミ、バカガイなどが主流をなしている。これ以外は、魚の小骨（タイ類）、鹿角片などが検出された。土器は、全て土器片である。主な出土土器は、加曾利E、阿玉台、堀ノ内、大洞などの各期に比定される土器片が検出された。

以上が各地区の概要であるが、A地区において確認された土壌と住居址内のPitなどが縄文期の遺構と判断されるが、上記3地区以外で、同台地上に縄文の集落が存在することと考えられる。

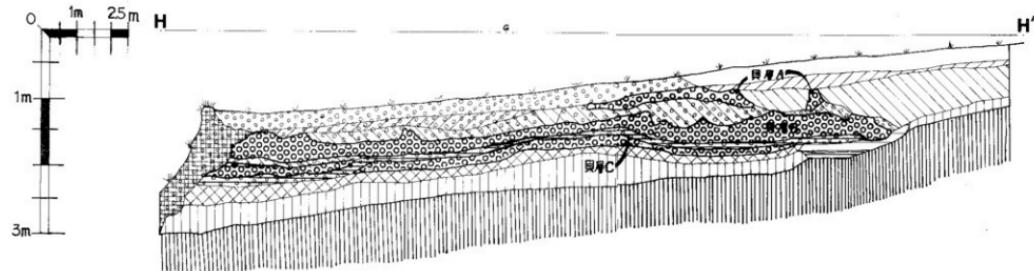
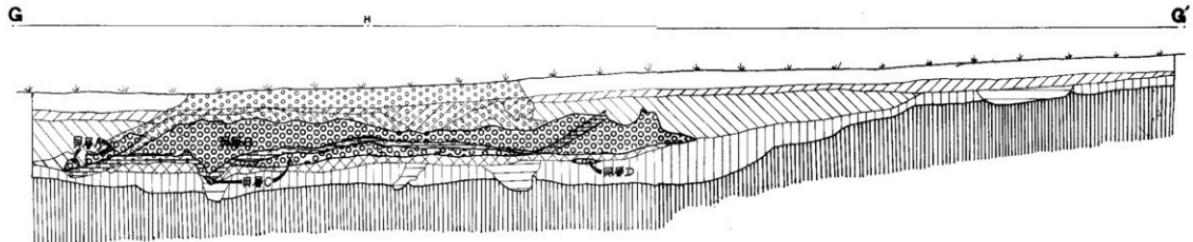




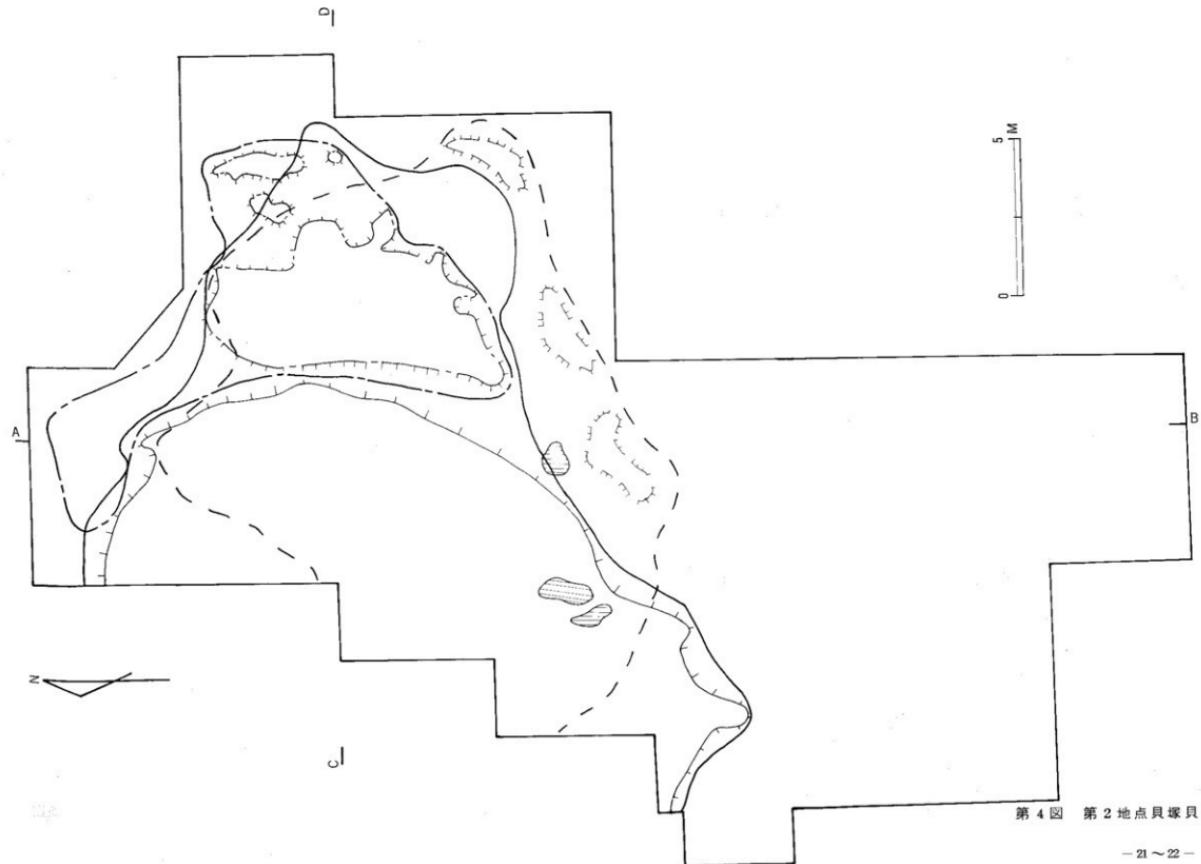
第1図 第1地点全測図・土層図



第2図 C地区第3地点全測図

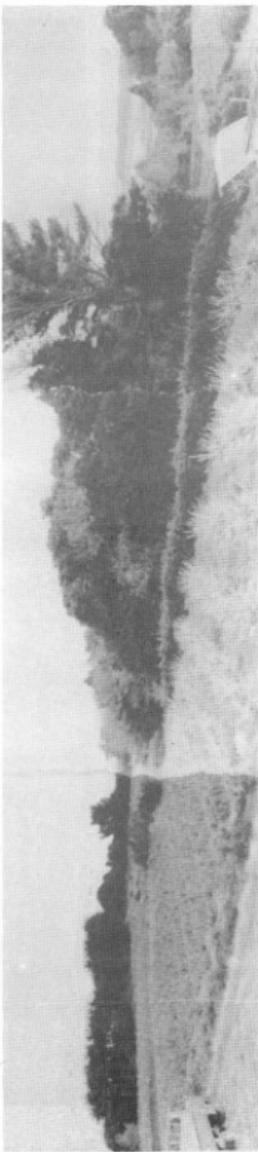
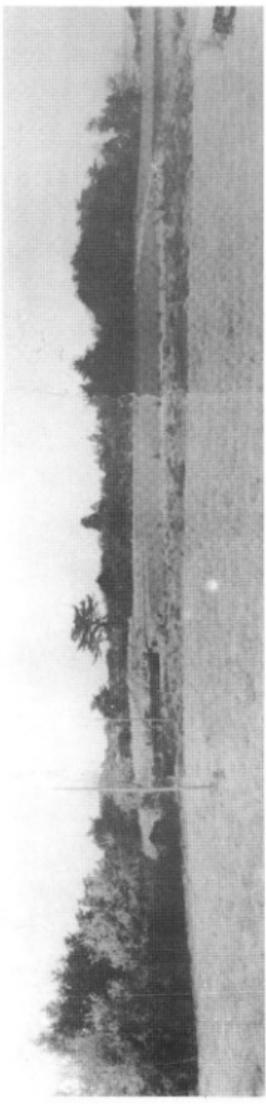


第3図 B地区第2地点貝塚貝層断面図

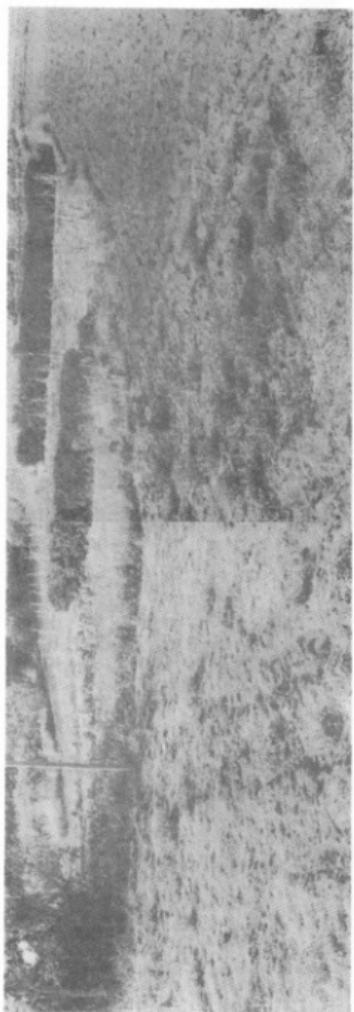
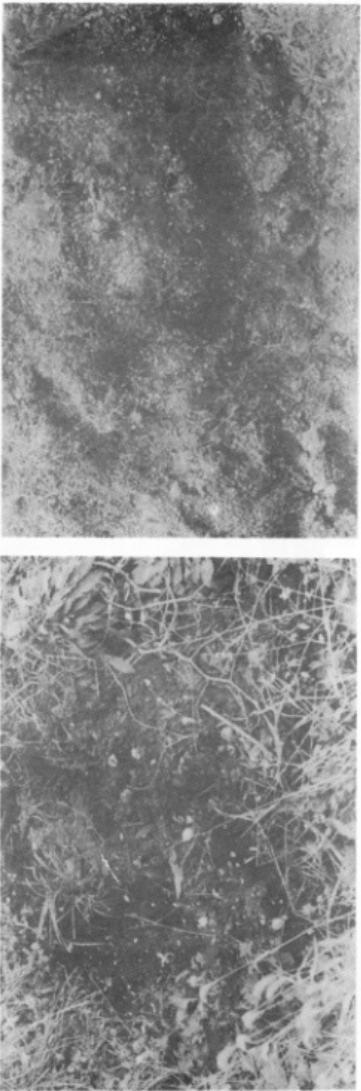


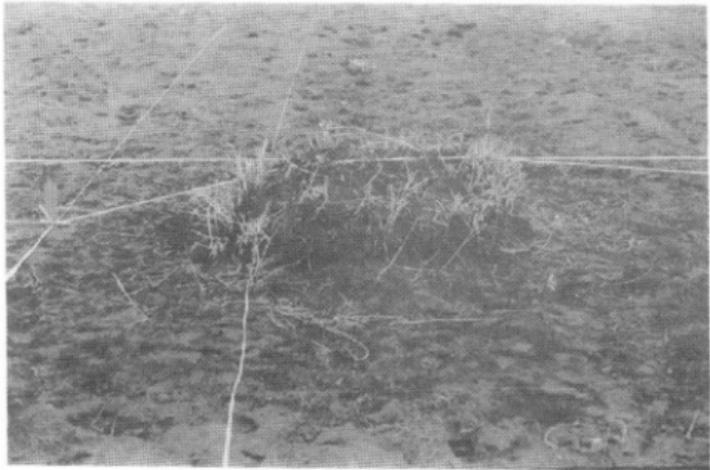
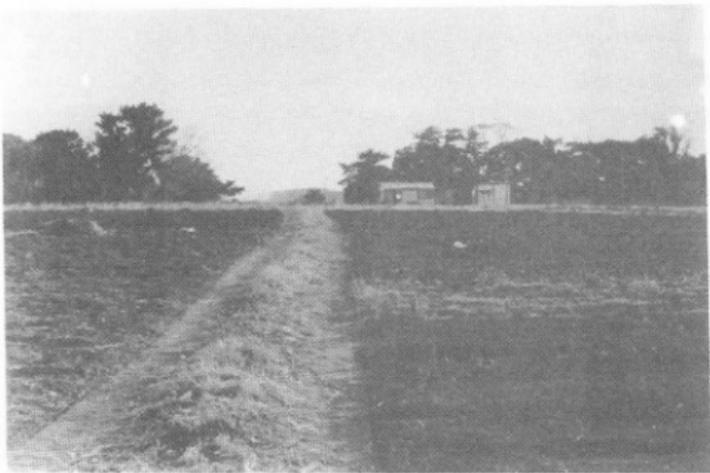
第4図 第2地点貝塚貝層分布図

図版第1 上 遺跡全景(南方より)、下 遺跡全景(東方の井久保貝塚を見る)

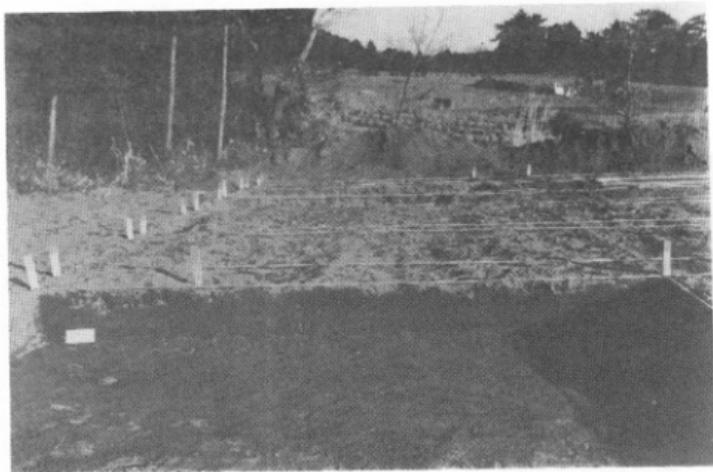


図版第2 上 貝塚(東方)より、下 貝殻の散布状況

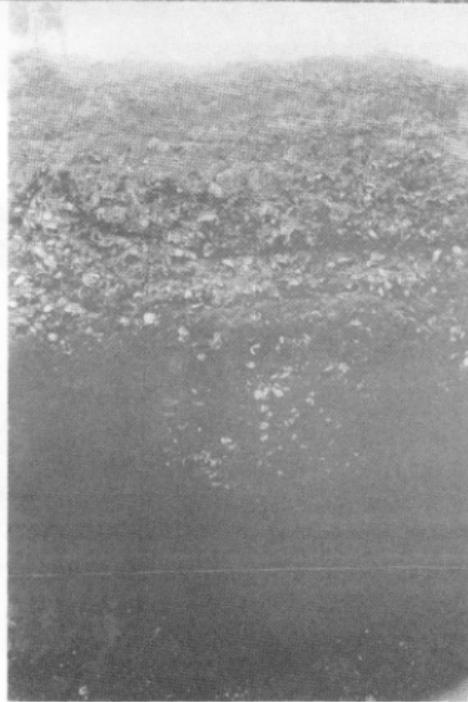
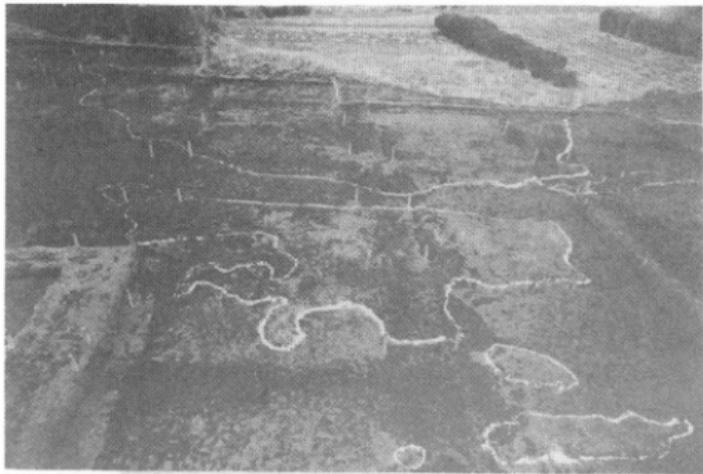




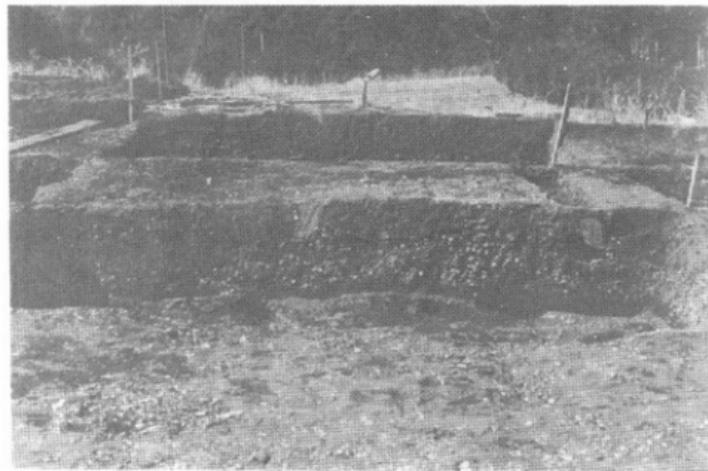
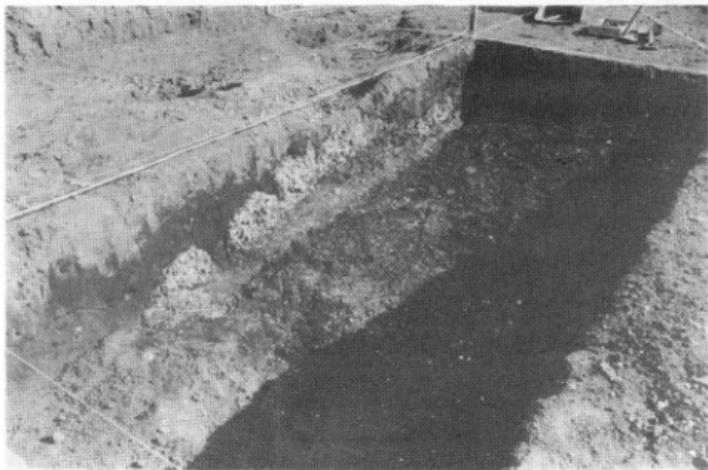
図版第3 上 第3地点塚(第1地点より), 下 塚近景(北方より)



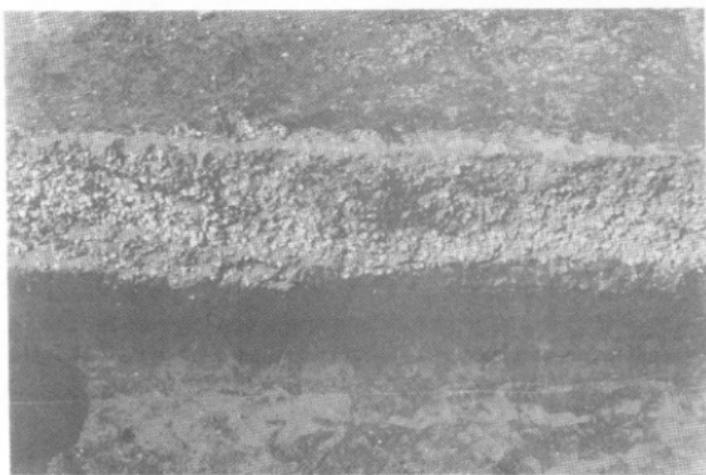
図版第4 第1地点(上・下)西方より



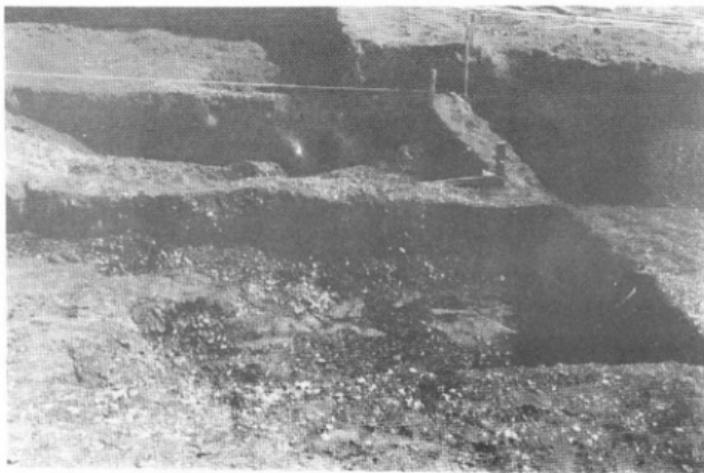
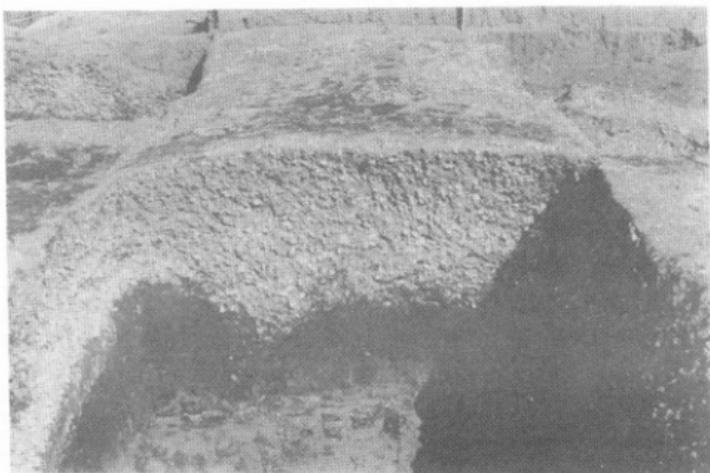
図版第5 貝層上面東から 貝層下土 断面



図版第6 東壁断面(上・西より), 東壁断面(下)



図版第7 第II・III層東壁中央断面(西、上より・上)、東断面(下)



圖版第 8

北斷面(上)

東斷面(下)

第 2 表 遺構一覧表

番号	名 称	方 位	形 状	大きさ (m)			カマド	備 考
				長 徑	短 徑	深 度		
1	第 1 号住居址	N - 20° - E	長 方 形	5.30	5.08	0.40	北壁中央	
2	第 2 号住居址	N - 23° - W	長 方 形	4.20	4.12	0.21	北壁中央	
3	第 3 号住居址	N - 3° - W	長 方 形	2.98	2.70	0.12	北壁中央	
4	第 4 号住居址	N - 0° - W	長 方 形	3.04	2.90	0.13	北壁中央	
5	第 5 号住居址	N - 41° - W	長 方 形	4.68	4.40	0.27	北壁中央	
6	第 6 号住居址	N - 3° - W	長 方 形	5.15	5.05	0.23	北壁中央	
7	第 7 号住居址	N - 0° - E	長 方 形	4.08	3.72		北壁東側	重複
8	第 8 号住居址							
9	第 1 号土壤							
10	第 2 号土壤	N - 22° - W	不整椭円形	1.85	0.55	0.25	中央は耕作のた 破壊	
11	第 3 号土壤	N - 0° - E	円 形	2.00	1.33	0.33		
12	第 4 号土壤	N - 0° - E	不整椭円形	2.14	1.48	0.45		
13	第 5 号土壤	N - 59° - W	椭 圆 形	2.50	1.00	0.15		
14	第 6 号土壤	N - 0° - E	不整椭円形	0.65	0.24	0.39		
15	第 7 号土壤	N - 54° - W	不整椭円形	2.16	1.40	0.15		
16	第 8 号土壤	N - 33° - W	不整椭円形	1.18	0.58	0.22		
17	第 9 号土壤	N - 53° - W	不整椭円形	1.65	0.72	0.20		
18	第 10 号土壤	N - 74° - E	隅丸長方形	1.50	1.03	0.20		
19	第 11 号土壤	N - 73° - W	不整椭円形	1.28	0.55	0.15		
20	第 12 号土壤	N - 10° - W	方 形	2.38	2.04	0.20		
21	第 13 号土壤	N - 23° - E	長 方 形	2.90	1.78	0.20		
22	第 14 号土壤	N - 0° - E	不整長方形	4.50	2.80	0.38		
23								
24	供 養 塚	N - 3° - E	不整椭円形	(底) 2.70		(高) 1.30		

第 1 号 住 居 址

(第 5 図・図版第 9)

この遺構は、第一地区の 2-14Gにおいて確認され、長径 5.30m、短径 5.08m、深さ 0.40m あり、N-20°-E に主軸を有し、長方形を呈する第 1 号住居址である。

床は、貼り床でしっかりとおり、周濠は幅 0.20m、深さ 0.10m で、底が丸いU字状を呈し全周しており、北壁中央部にあるカマドに接している。

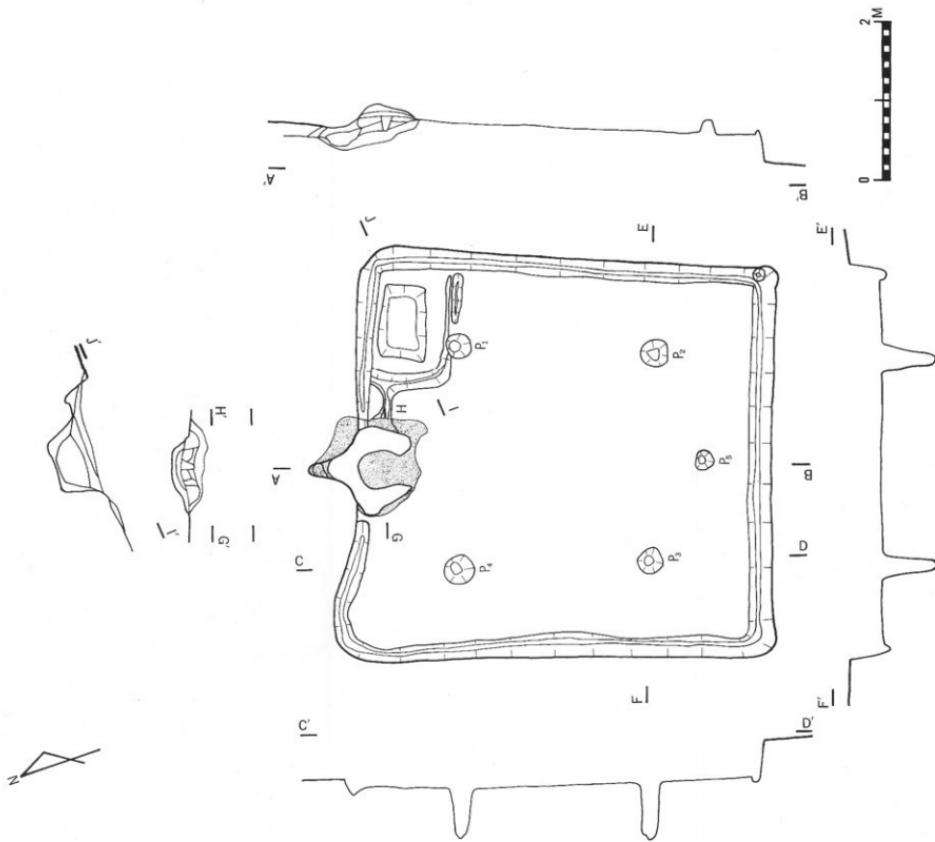
カマドは、煙道部が一部破壊されているが、白色の砂質粘土で構築されている。燃焼部と焚口は共に狭く、燃焼部下の基底部があり焼けていない。カマドの基底部は、住居址の床を凹めて、基底部としている。

柱穴は、P₁から P₅まで 5 本検出された。P₁、P₂、P₃、P₄が主柱穴であり、P₅が支柱穴と考えられる。深さは、P₁から P₄が 0.65m～0.75m あり、P₅は 0.20m である。

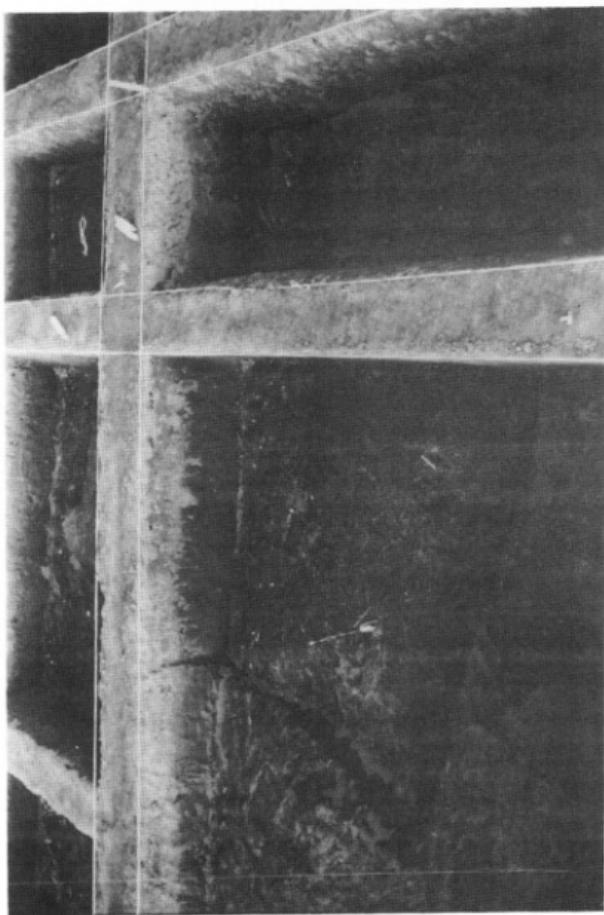
貯蔵穴は、長径 0.95m、短径 0.60m、深さ 0.55m あり、長方形を呈している。外側には、幅 0.20m、高さ 0.05m の貼り付けを有し、住居址内を区切り、住居址の北東コーナーで確認された。この、貼り付け部分を含めると貯蔵穴の大きさは、長径 1.53m、短径 1.00m となる。

土層は、住居址内全域に黒色土が堆積しており、炭化物（木炭）、壁付近に焼土、土師器片、などが混入している。また、床面からは、甕、壺、壺、などの完成品が検出された。

第5圖 第1号住居址実測図



図版第9 上 第1号住居址セクションベルト



第1号住居址出土遺物

(第6・7図)

この住居址からは、第6図に示した甕、壺と、第7図に示した壺、手捏土器、などが検出された。上記以外の遺物としては、壺、甕などの小破片が検出された。

(1) 甕類(第6図、M1、M2、M3、M4)

M1とM4は、完型品であり、M2とM3は、下胴部以下を欠損している。M1は、口縁部が外返しで、胴上部に最大幅を有している。口縁部はなでつけ、胴部はヘラ状工具により調整されている。M2は、口縁部が外返しで、口唇部がやや折り返されている。胴上部には、明瞭な稜を有している。また、胴部には輪積痕が認められる。口縁部はなでつけで、胴部はヘラ状工具による横ナデである。

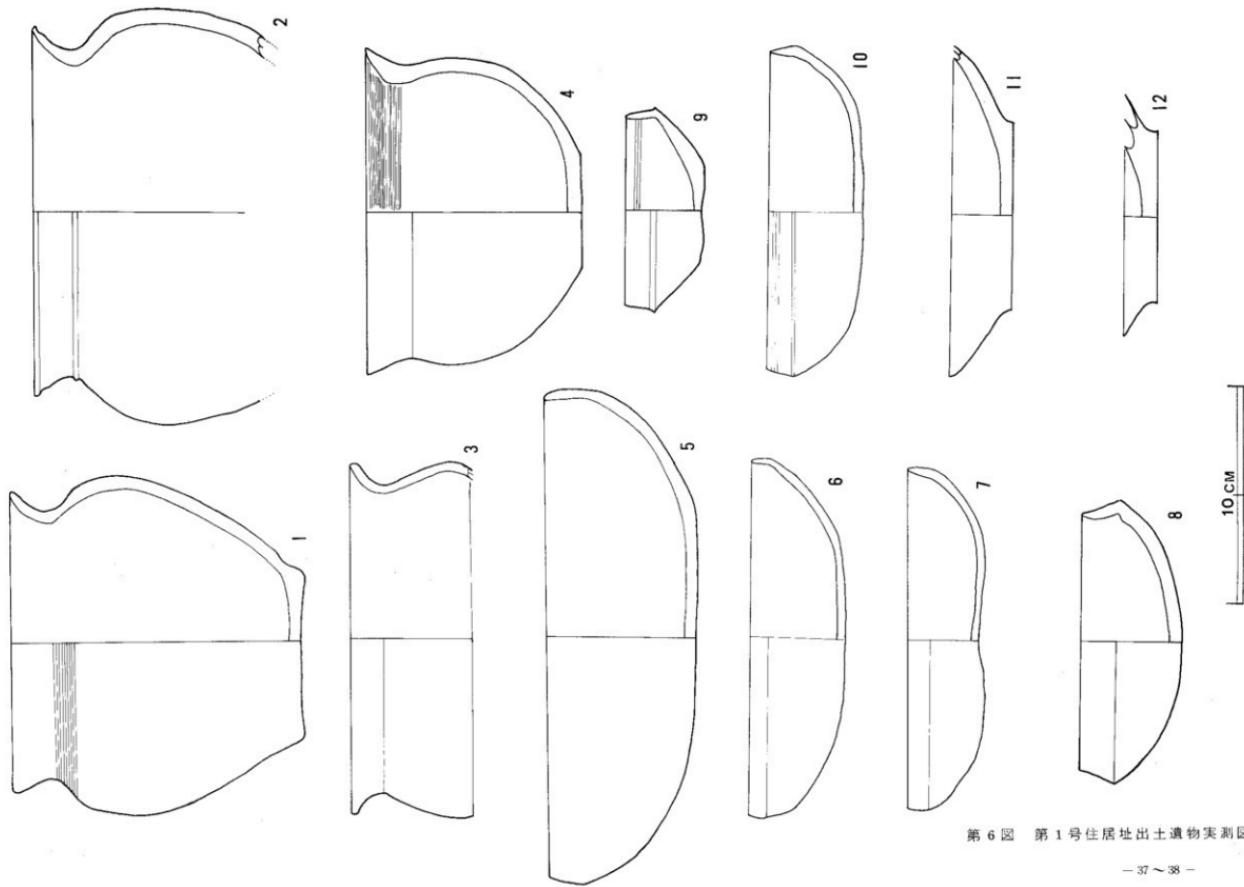
M3は、口縁部が外返しである。口縁部はなでつけであり、胴部はヘラ削りによる調整である。M4は、口縁部、胴部、とを一部欠損しており、下胴部以下は認められなかった。完存率は、約1/3程度である。口縁部が外返ししている。整形は、口縁部がなでつけであり、胴部はヘラ状工具による調整である。

(2) 壺類(第6図、M5～M10)

壺類では、第6図M5が最も大型であり、他はM8の壺(小型)以外は、中型とでもいえるものである。

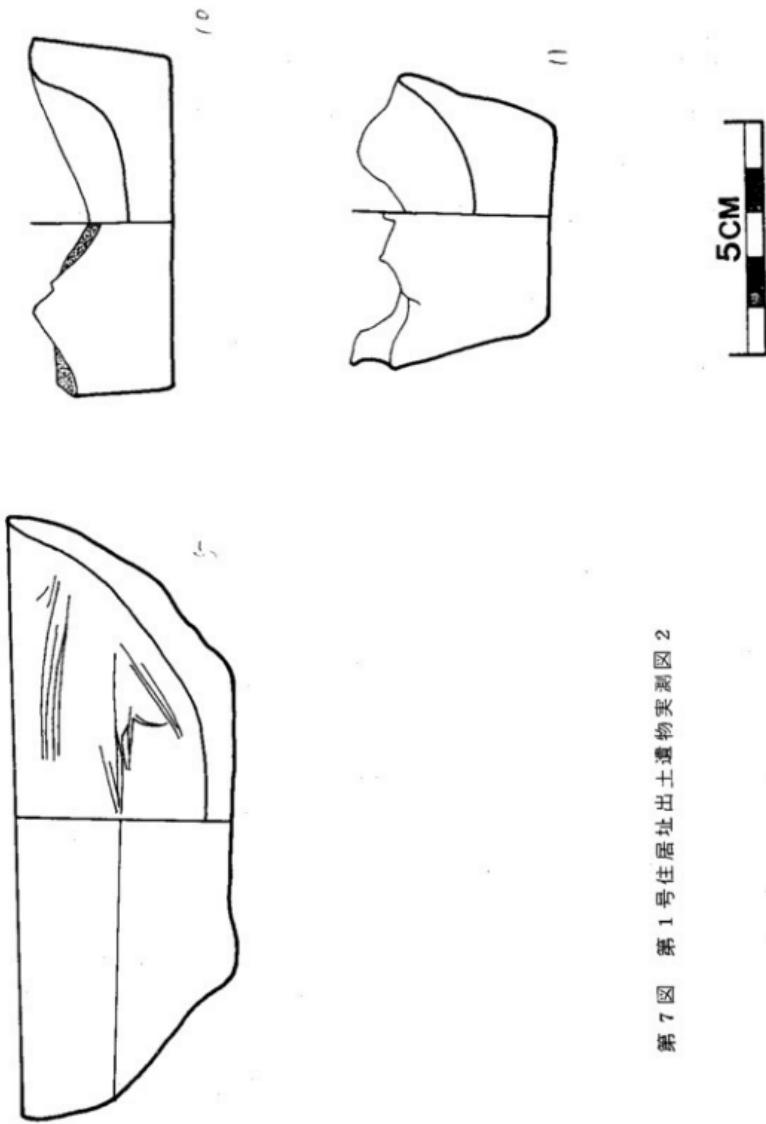
M5とM8は、口縁部が内傾しており、M7とM9は、口縁部が直立している。M4とM6は、口縁部が内傾しており、口縁部下に明瞭な稜を有している。

M4、M5、M8の3点は、底部が平底であるが、他の遺物は丸底である。



第6図 第1号住居址出土遺物実測図 1

第7圖 第1号住居址出土遺物實測圖2



第3表 第1号 住居址出土遺物一覧

No.	名称	現高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	整 形	備 考
1	壺	14.0	13.8	7.6	長石の細粒	良	赤褐色	ヘラ状工具による調整	
2	甕	10.2	17.0		長 石	良 好	赤褐色	口縁なでつけ 胴 横 なでつけ	輪積痕あり
3	甕	5.7	16.0		長 石	良 好	赤褐色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	下胴部以下欠損
4	壺	10.0	15.0		長石の細粒	普	赤褐色	口縁内側なでつけ	
5	坏	7.1	22.2	9.0	長石の細粒	良	黄褐色		
6	坏	4.5	16.2		石英の細粒	良 好	黄褐色		
7	坏	3.5	15.2		石英の細粒	良 好	褐 色		
8	坏	4.6	11.8		石英の砂粒	良 好	黒褐色		
9	坏	3.7	8.8	4.5	石英の砂粒	良 好	褐 色		
10	坏	4.4	14.6		石英の砂粒	良	褐 色	口縁内外なでつけ	
11	鉢	2.4		8.5	石英の砂粒	普	赤褐色		
12	鉢	2.3		8.0	石英を含む	普	黄褐色		

第 2 号 住 居 址

(第 8 図)

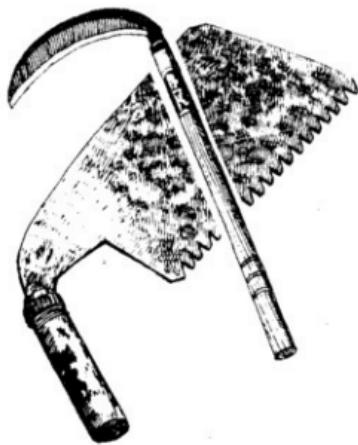
この遺構は、第 1 地区の 3-17 g で、第 1 号住居址の南東 2.0 m で確認されたので、調査地点を拡張して完掘したものである。長径 4.20 m、短径 4.12 m、深さ 0.21 m あり、N-23-W に主軸を有し、長方形状を呈する第 2 号住居址である。

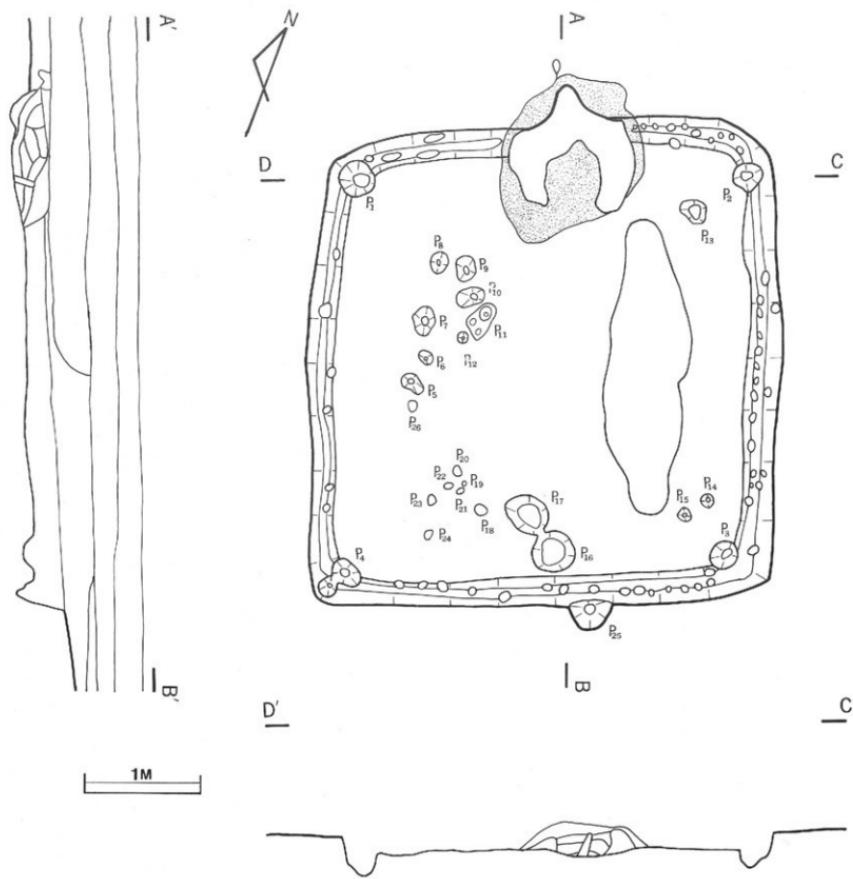
床は、貼り床であるが軟弱である。周濠は、幅 0.30 m から 0.40 m、深さ 0.10 ~ 0.20 m ある。底は、丸い U 字状を呈し全局している。また、周濠内からは 54 本の小 pit が検出された。壁は、斜めに立ち上がっている。

カマドは、北壁の中央部にあり、周濠と接している。上部を欠損しているが、床面を凹め白色の砂質粘土で、構築されている。燃焼部は浅く、この部分から土製支脚が一本検出された。

柱穴は、周濠内に 54 本の小 pit と、床面に 25 本の pit が検出された。周濠内の小 pit は、周濠に沿って検出され、非常に浅いものである。床面から検出された柱穴のうち、住居址の各コーナーに接している P₁、P₂、P₃、P₄ の 4 本が主柱穴であり、住居址の南側にある P₅、P₆、南壁に接している P₇、の 3 本が主柱穴と考えられる。残りの 18 本の pit は、この住居址に共なるものかどうか不明であるが、この住居址に先行する遺構と考えられるが、何の遺構かは不明である。

住居址内の土層は、1 層で黒色土が堆積しており、土師器片が数点検出された。なお、住居址床面の東側にある椭円形の遺構は、この住居址に先行する土壤（第 1 号土壤）である。





第8図 第2号住居址実測図

第 3 号 住 居 址

(第9図・図版第10・11)

この遺構は、第1号住居址の西方14.00mにおいて確認され、長径298m、短径270m、深さ0.12mあり、N-3°-Wに主軸を有し、南側がやや狭くなっているが、長方形を呈する第3号住居址である。

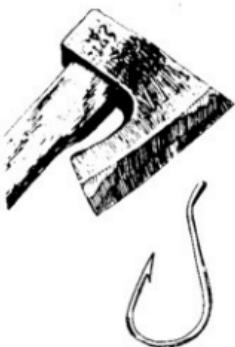
床は、貼り床であり、比較的しっかりとれている。周濠は、カマド付近で切れているが、ほぼ全周している。幅と深さは、0.10～0.15mであり、底は丸いU字状を呈している。

壁は、北壁、南壁、西壁では、ほぼ垂直に立ち上がっているが、東壁は攪乱による破壊が著しいため不明である。

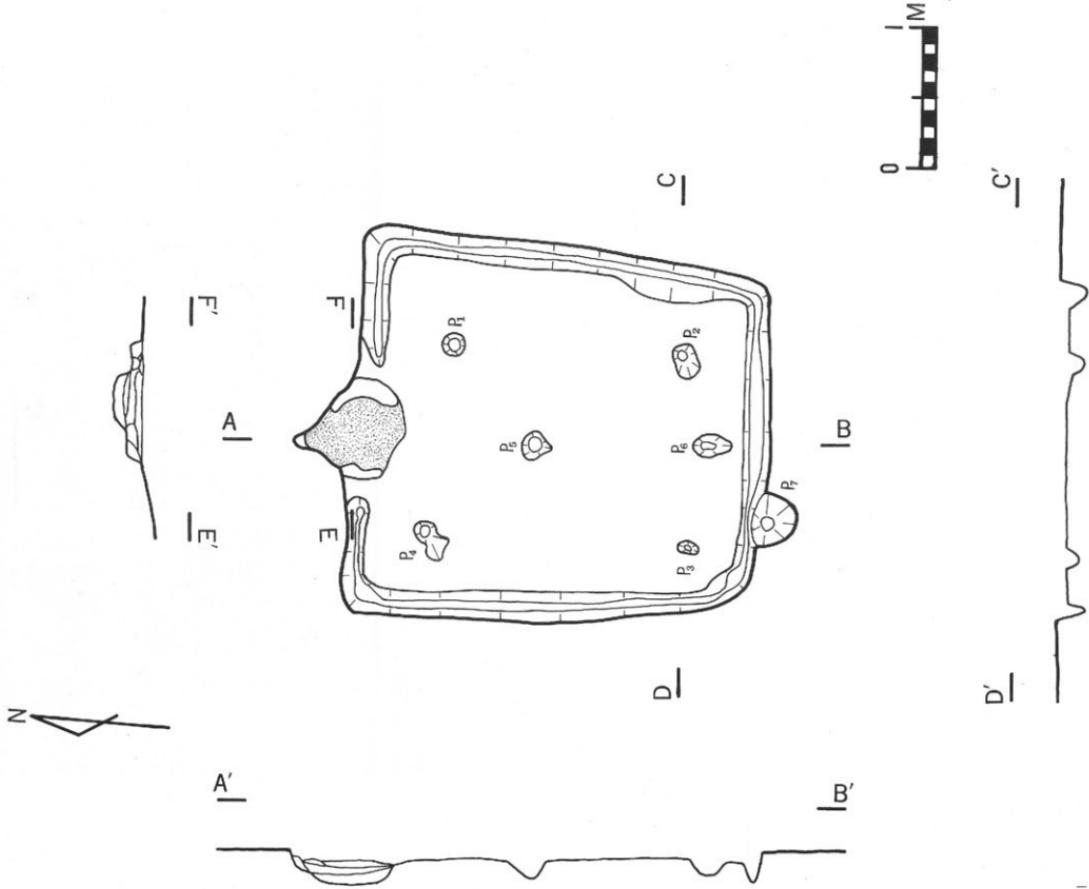
カマドは、上部を耕作による攪乱のため破壊されており、燃焼部と基底部のみを残すだけである。燃焼部は、0.10m程度と浅く基底部は床を凹めて造っている。また、燃焼部下の床は、あまり焼けていない。

柱穴は、全部で7本検出された。 R_1 、 R_2 、 R_3 、 R_4 が主柱穴であり、 R_5 、 R_6 が支柱穴と判断されるが、南壁に接して検出された R_7 は、用途は不明であるが支柱穴の1本と判断される。

土層は、黒色土が堆積しており、須恵器片や石（自然石）、などが黒色土中より検出された。



第9圖 第3号住居址実測図

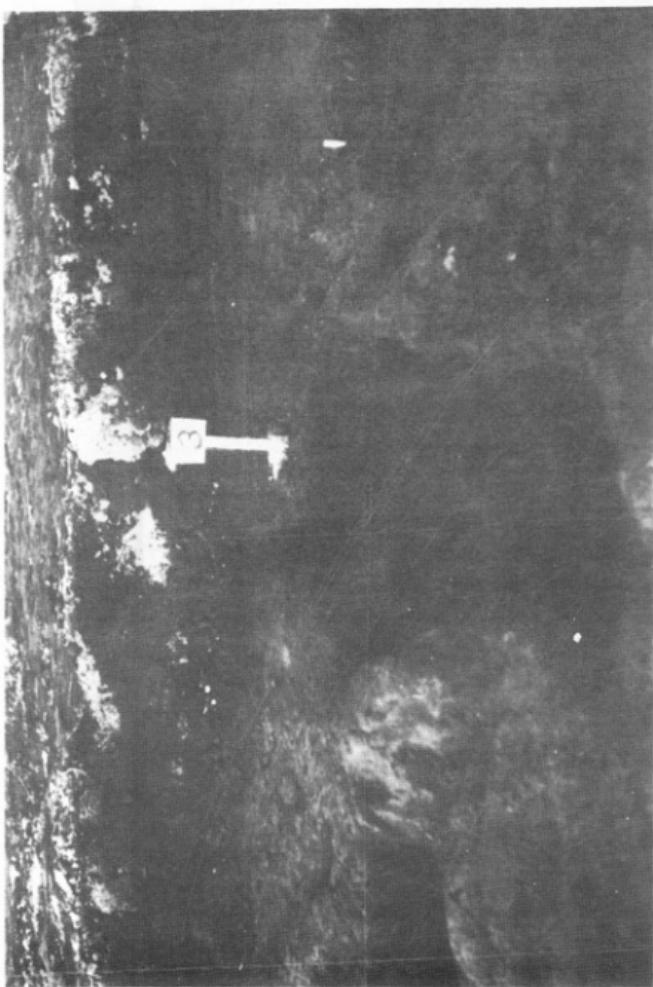


第3号住居址平面

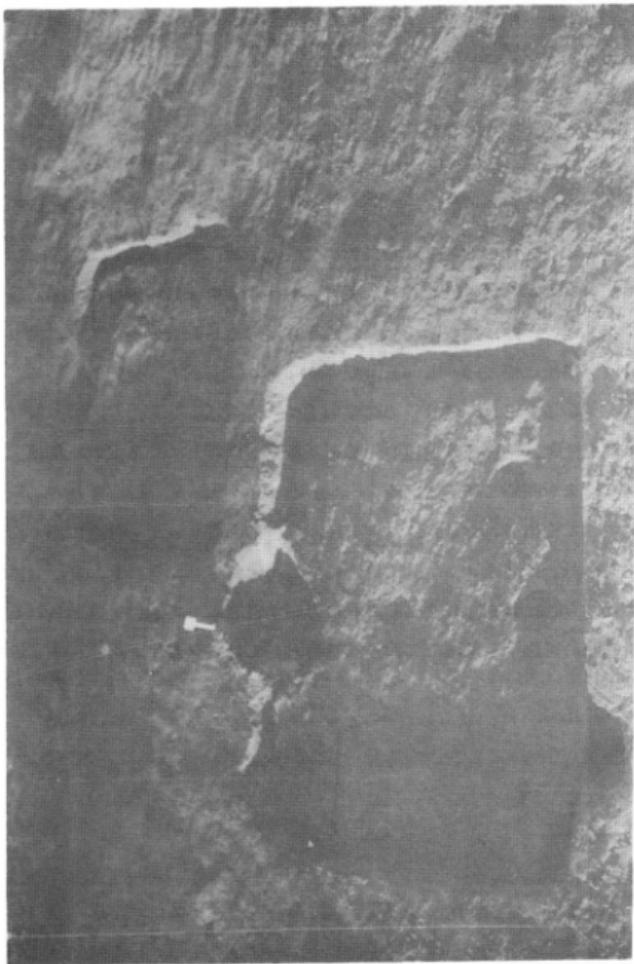
圖版第 10



第3号住居址カマド



圖版第 11 第 3 號住居址平面



第 4 号 住 居 址

(第 9 図)

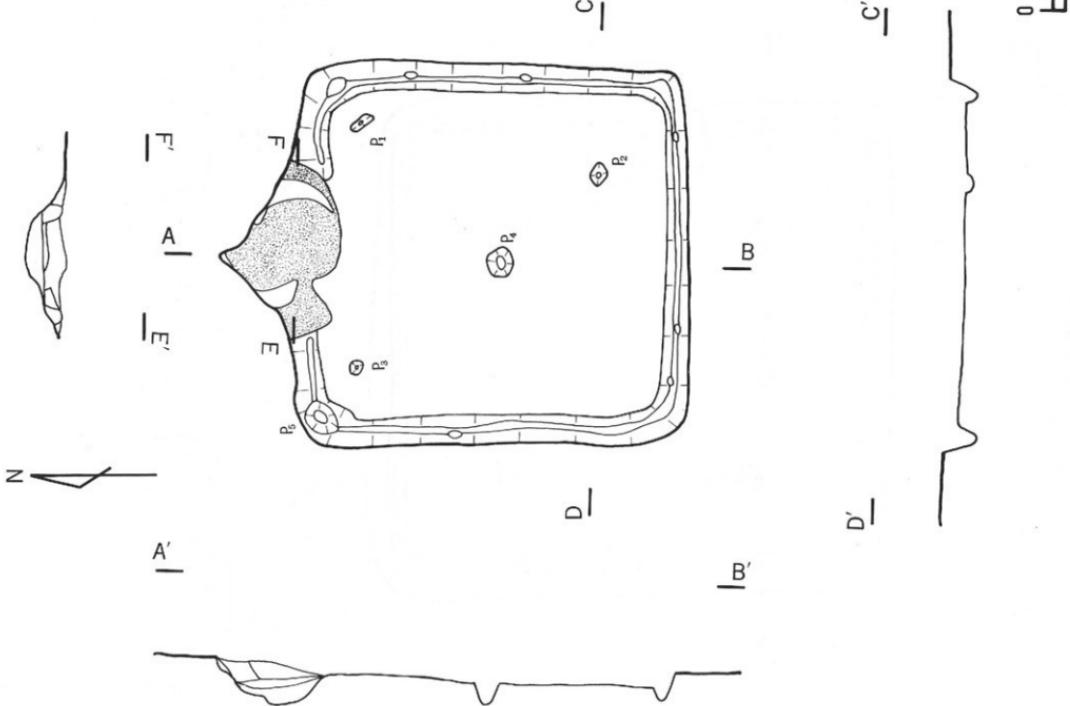
この遺構は、第 3 号住居址の北西 0.50m において確認され、長径 3.04m、短径 2.90m、深さ 0.13m あり、N—θ—E に主軸を有し、長方形を呈する第 4 号住居址である。第 3 号住居址とほぼ並行して近距離にあるので、同時の存在は考えられないが、床は、貼り床でしっかりとしており、周濠は幅 0.12～0.15m、深さ 0.10～0.15m あり、全周している。底は丸い U 字状を呈している。また、壁は斜めに立ち上がっている。

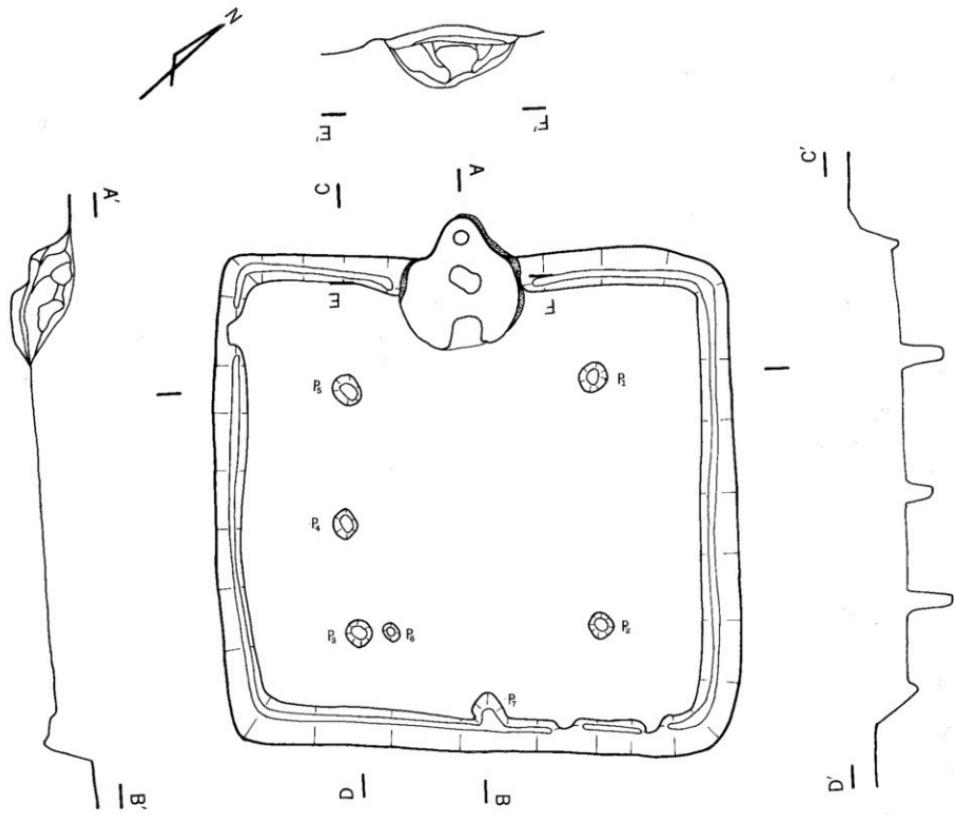
カマドは、上部を欠き、燃焼部、煙道の一部・基底部が残存している。燃焼部は、0.07m と浅く基底部は、床を凹めて造っている。

柱穴は、全部で 5 本検出された。 P_1 、 P_2 、 P_3 は、住居址の各コーナー付近にあり、 P_4 は住居址のほぼ中央に、 P_5 は北西コーナーで周濠に接して確認されたが、 P_1 、 P_2 、 P_3 は小さくかつ浅いため主柱穴とは考えられず、 P_4 、 P_5 の方が主柱穴として適当と判断される。

土層は、住居址内に黒色土が堆積しており、遺物としては須恵器片が黒色土中より検出された。

第9図 第4号住居址実測図





第10図 第5号住居址実測図

1M

第 5 号 住 居 址

(第 10 図・図版第 12・13)

この遺構は、第 1 号 住居址 の南西約 1.00 mにおいて確認されたので調査地を拡張して発掘したものである。長径 4.68 m、短径 4.40 m、深さ 0.27 m あり、N-4F-W に主軸を有し、東西に長い長方形を呈している。

床は、貼り床でしっかりとされている。周濠は、3ヶ所ほど切れているが、幅 0.20 m、深さ 0.10 m でほぼ全周しており、カマドと接している。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。

カマドは、北壁の中央部に位置し、ほぼ完全な形で検出された。燃焼部は、0.04 m と浅く上方より褐色土の流入が認められる。カマドの本体である白色の砂質粘土は、ほぼ原型を保っており、焚口外より 2 本の土支脚が検出された。

柱穴は、6 本検出された。 R_1 、 R_2 、 R_3 、 R_4 の 4 本が主柱穴と判断され、0.40 m の深さがある。 R_2 と R_3 は、深さが 0.25 m と浅く支柱穴と考えられる。

遺物は、甕、壺、碗などの完型品が、床面上 0.10 m 程度の所から検出された。

この住居址からは、甕、壺が検出されたが、第 10 図に示した遺物以外は、全て小破片であり、実測不可能な物である。 $\#1 \cdot 2$ は甕型土器であり、共に完型品であり、 $\#2$ は、土器の器面に輪積痕を明瞭に残している。色調は共に赤褐色で、2 次火炎を受けたようである。口縁部は横なので、胴部以下はヘラ状工具による調整である。

$\#3$ から $\#5$ までが壺型土器である。 $\#3$ が完型品である以外は、共に底部を欠損している。 $\#3$ は底が平底で、胴上部に比較的鋭い稜を有し、口縁部はほぼ直立している。

$\#4 \cdot 5$ は丸底と推定され、 $\#4$ は口縁部がほぼ直立しているが、 $\#5$ は底部から口縁部まで半球状を呈している。共にカマド内から出土しており、口縁部は横なので、胴部以外はヘラ状工具により調整されている。

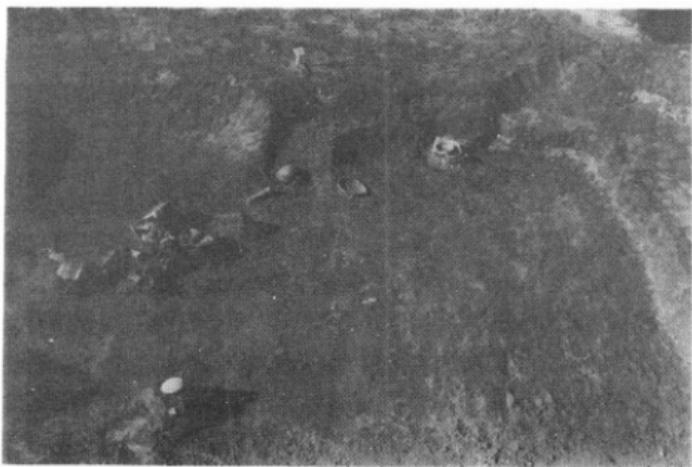
第5号住居址（南方より）

図版第12



第5号住居址カマド





図版第 13 上 第 5 号住遺物出土状況、下 第 5 号住カマド東側壊出土状況

第 5 号 住 居 址 出 土 遺 物

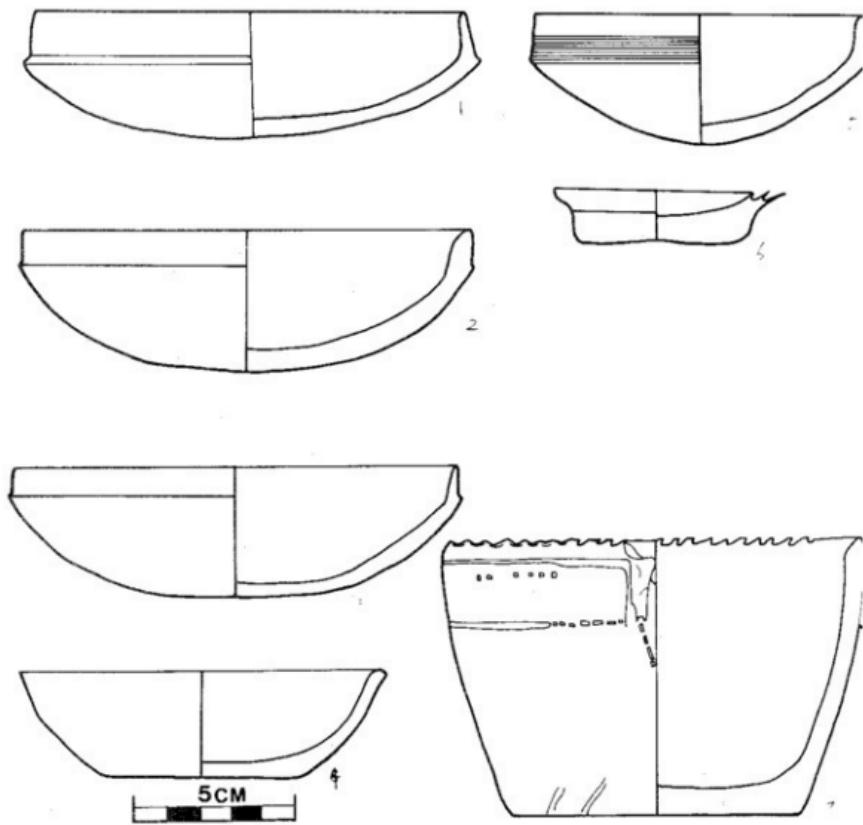
(第 11 図)

この住居址からは、甕、壺、が検出されているものの、第11図に示した遺物以外は全て小破片であり実測不可能なものである。

M1 と M2 は、甕型土器であり、共に完型品である。M1 と M2 は、輪積痕が認められるが、M2 が明瞭に残っている。色調は、共に赤褐色を呈しており、2 次火焔を受けたようである。整形は、口縁部は横なので、胴部以下はヘラ状工具による調整である。

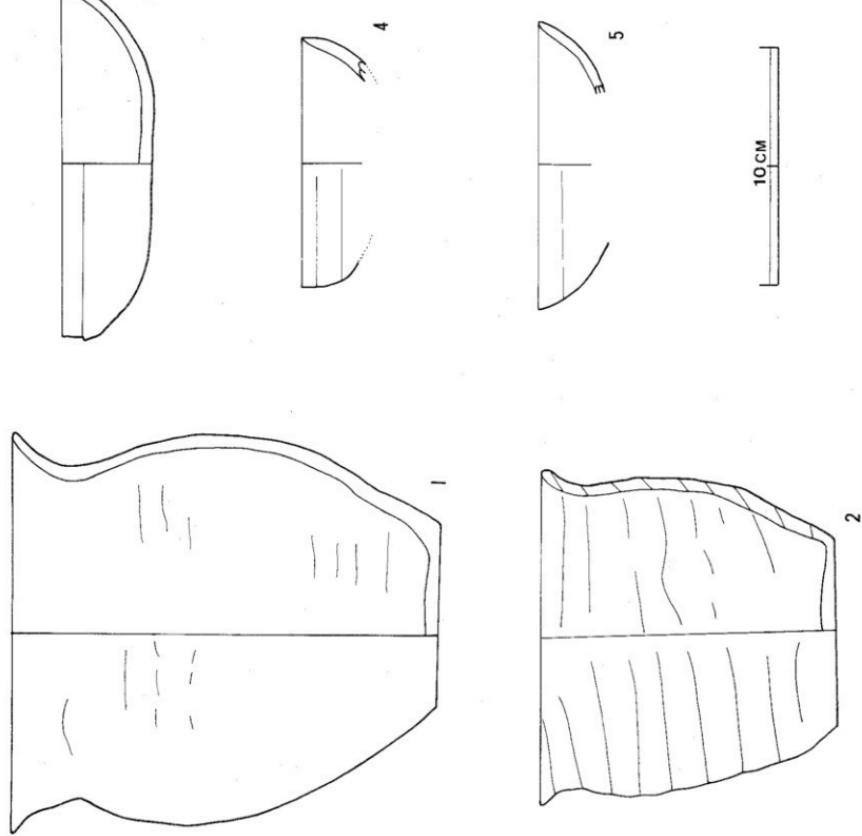
M3 から M5 までが、壺型土器である。M3 が、完型品である以外は全て底部を欠損している。M3 は、平底であり胴上部に比較的鋭い稜を有し、口縁部はほぼ直立している。

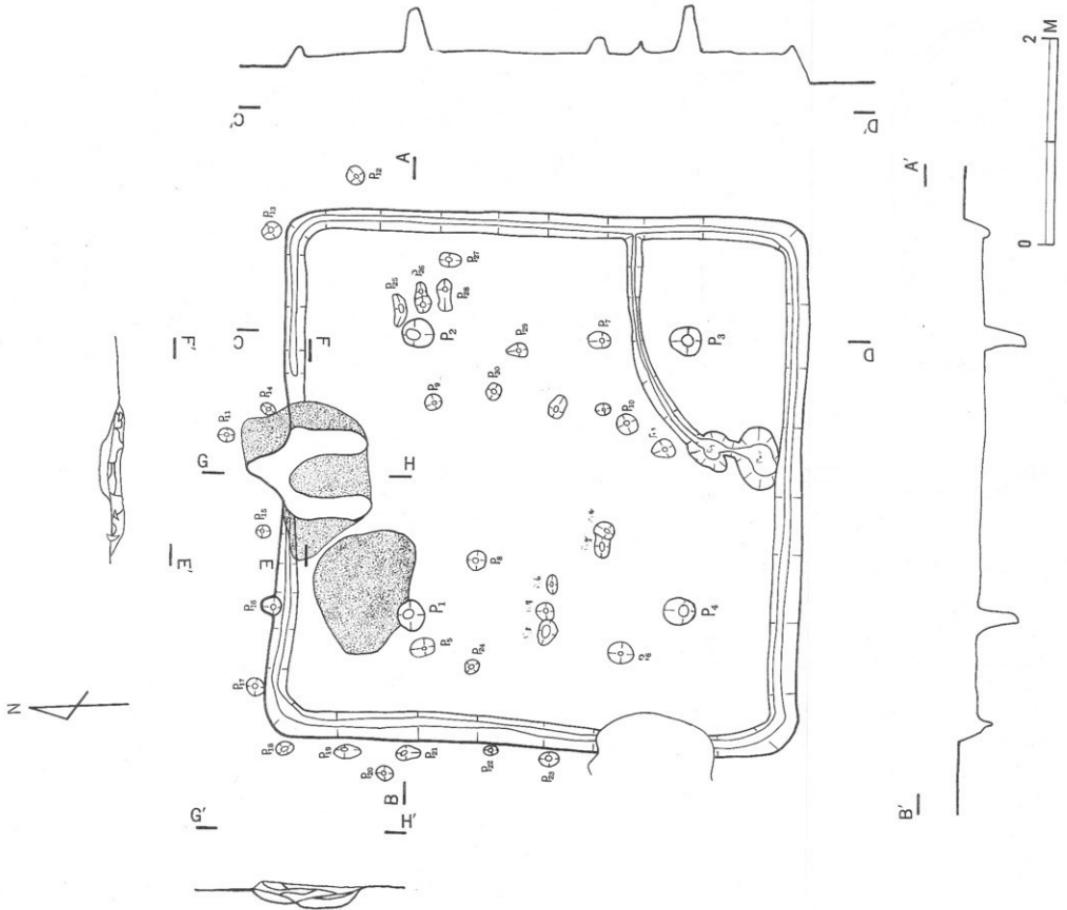
M4 と M5 は、共に丸底と推定され、M4 は口縁部がほぼ直立しているが、M5 は、底部から口縁部まで半球状を呈している。共にカマド内から検出された。整形は、口縁部が横なので、胴部以下はヘラ状工具により調整されている。



第 11 図 第 5 号住居址出土遺物実測図

第11圖 第5号住居址出土遺物実測図





第12図 第6号生歯業実測図

第4表 第5号 住居址出土遺物一覧

No.	名称	現高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎 土	焼成	色 調	整 形	備 考
1	甕	7.9	16.8	2.7	硬雲母	良好	赤褐色	口縁なでつけ 胴 ハラ調整	
2	甕	12.7	14.0	8.0	硬雲母	良好	赤褐色	口縁なでつけ 胴 ハラ調整	
3	坏	4.1	14.3	7.0	長石の 細粒	普通	黒褐色	口縁なでつけ 胴 ハラ調整	
4	坏	2.7	10.5 (推)		長石の 細粒	普通	褐色	口縁なでつけ 胴 ハラ調整	カマド内出土 実存率 1 / 3
5	坏	2.8	12.0 (推)		長石の 細粒	良好	赤褐色	口縁なでつけ 胴 ハラ調整	カマド内出土 実存率 1 / 3

第 6 号 住 居 址

(第 12 図)

この遺構は、第 1 地点の 2-23G を中心として確認されたのでカマドなど破損部分がある。長径 5.15m, 短径 5.05m, 深さ 0.23m あり, N-3°-W に主軸を有し, 東西にやや長い長方形を呈している。

床は、中央部から北東部にかけて、凸凹を有するが総体的には平坦でありしっかりしている。周濠は、幅 0.20m, 深さ 0.10m あり、全周している。底は、丸い U 字状を呈している。壁は、斜めに立ち上がっている。

カマドは、北壁の中央に位置しているが、耕作などによる攪乱のため上部が破壊されており、カマドの内部も上方からの圧力により破壊されている。基底部は、床を凹めて基底部としている。また、両袖の部分から多量の土師器片が検出された。

第6号住居址出土遺物

(第13図)

この住居址からは、鉢型土器、壺型土器、高壺型土器が検出されたが、第13図に示した遺物以外は実測不可能な遺物である。

(1) 鉢型土器 (第13図 №1)

この土器は、口縁部が平らで外返ししており、口唇部先端は折返しである。口縁部から底部にかけては、ゆるやかに下降している。胴上部には焼成時に出来たと思われる歪が認められる。整形は、口縁部がなでつけであり胴部から底部にかけては、ヘラ削りによる調整で底部はヘラ削りである。

(2) 壺型土器 1類 (第13図 №3, 9, 11, 12, 13)

この類に入る壺型土器は、№3, №9, №11, №12, №13 の5点がある。口縁部が内傾し、胴上部にはやや鋭い稜を有し、底は丸底である。№3は、口縁部がやや湾曲しながら内傾している。№9は、口縁部に輪積痕を残している。整形は、口縁部がなでつけ、稜以下はヘラ状工具による横なでである。

(3) 壺型土器 2類 (第13図 №7, 8)

この類に入る壺型土器は、№7, №8がある。口縁部が直立し、胴上部には鋭い稜を有している。底は、丸底である。№7は、口唇部と胴上部とが狭く、口縁部がやや肥厚である。

整形は、口縁部はなでつけであり、胴部はヘラ状工具による横なでである。

(4) 壺型土器 3類 (第13図 №6)

この類では、№6がある。底部を欠損しているが、現高4.7cmで推定高は5.2cmであり、底は丸底と推定され、湾曲しながら口縁部に至る。口縁は内傾しており、稜の部分は丸味を有している。口縁部はなでつけ、胴部はヘラ状工具による調整である。

(5) 壺型土器 4類 (第13図 №2, 10)

この類に入る坏型土器としては、第13図のA62とA610がある。底は丸底で、なだらかに立ち上がり口縁部に至る。口縁部は、直立している。稜は、認められるが坏1類ほど明瞭ではない。

(6) 坏型土器 5類（第13図 A64, 5）

この類では、第13図A64とA65がある。底は丸底であり、全体的に半球状を呈している。口縁部も丸味を持ちながら、やや内傾している。

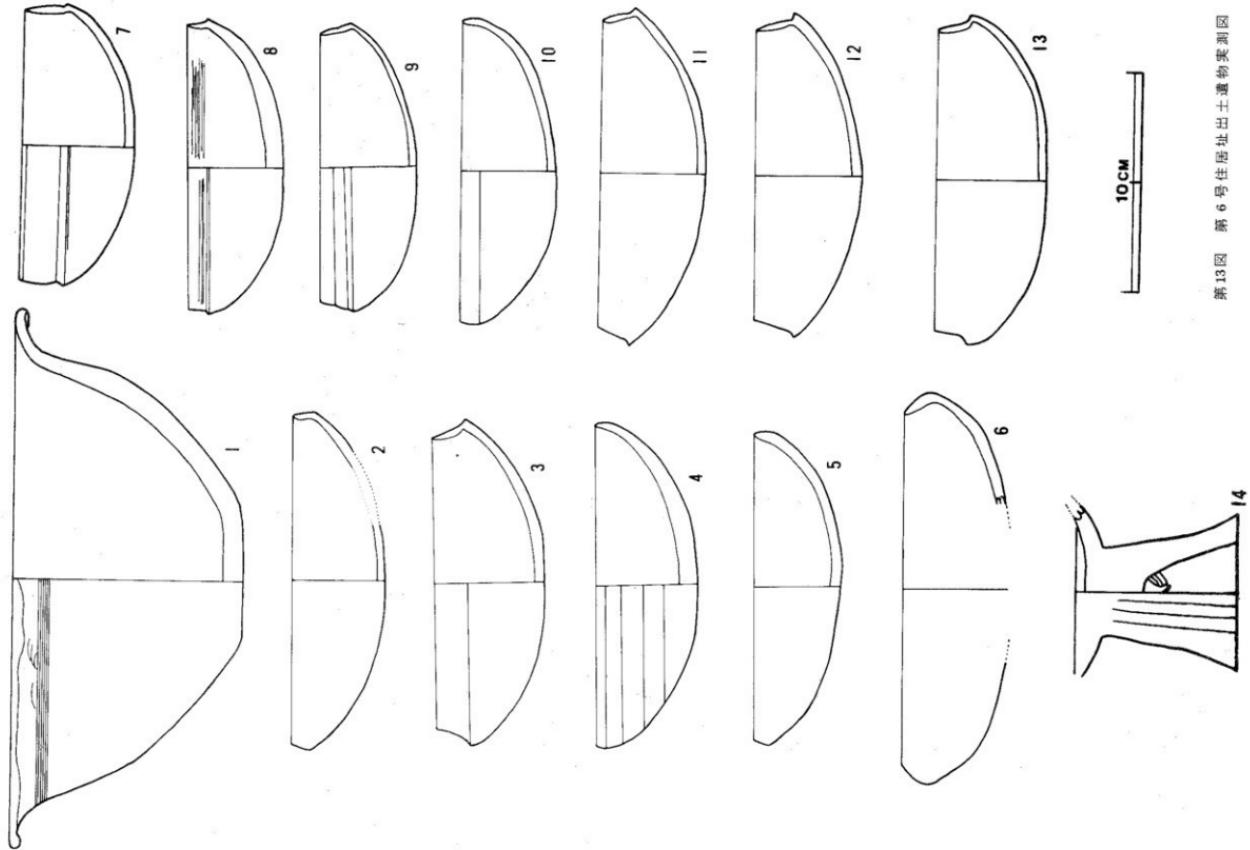
整形は、口縁部は横なで、胴部から底部にかけてはヘラ状工具による調整である。

(7) 高坏（第13図 A614）

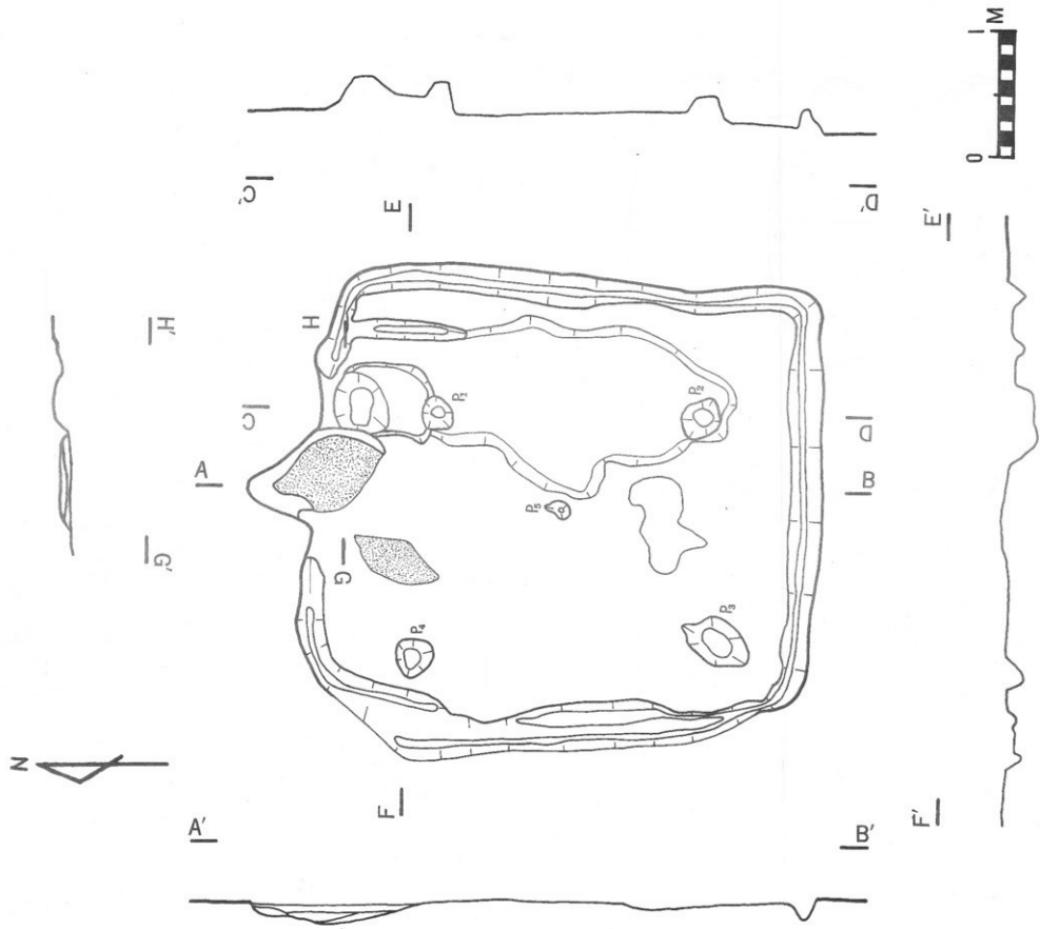
この高坏は、坏底部と器台部だけである。現高 7.4 cm, 器台底径 7.2 cm, 坏部径 7.8 cm ある。坏部は、内外共にヘラなでであり、器台部は縦方向へのヘラ削りである。



第13図 第6号住居址出土遺物実測図



第14圖 第7号住居址測量図



第5表 第6号 住居址出土遺物一覧

名	名称	現高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	胎 土	焼成	色 調	整 形	備 考
1	鉢	10.6	25.3	6.3	石英粒子	普	赤褐色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	
2	坏	4.3	15.3		石英粒子	良	褐 色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	胴部を一部 欠損
3	坏	5.1	14.8		石英粒子 堅	良	赤褐色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	
4	坏	4.8	14.8		石英粒子 堅	良	黄褐色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	
5	坏	4.5	14.1		石英粒子 堅	良	黄褐色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	
6	坏	4.7	16.0		石英粒子	良	褐 色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	底部欠損
7	坏	5.1	12.6		石英粒子	良	褐 色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	
8	坏	3.9	13.0		石英粒子	普	外黒色 内褐色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	
9	坏	4.7	13.1		石英粒子	良	赤褐色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	
10	坏	4.9	13.8		石英粒子 堅	良	褐 色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	
11	坏	5.3	15.3		石英粒子 堅	良	褐 色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	口縁部を一 部欠損する。
12	坏	4.9	14.6		石英粒子 堅	良	褐 色	口縁なでつけ 胴ヘラ削り	
13	坏	5.0	14.8		石英粒子	良	褐 色	口縁なでつけ 胴ヘラがき	
14	高坏	7.4		7.2	石英粒子 堅	良	褐 色	脚 部 の 縦 の ヘラ削り	坏下胴部以 上を欠損す る。

第 7 号 住 居 址

(第 14 図)

この遺構は、第 1 地区の 1 - 3 ⑨において確認され、長径 4.08 m、短径 3.72 m あり、N - 0° - E に主軸を有し、不整長方形状を呈する第 7 号住居址である。発掘前は、桑畠となっていたため、擾乱が著しく遺構の保存状態は不良である。

床は、2 段の貼り床となっている。上段の貼り床は、中央付近でのみ確認され、カマド、西側周濠、西内側周濠、とを伴なっており、東西径は 3.5 m である。この周濠は、カマド付近と西側で一部切れているが、ほぼ全周している。4 本の柱穴 (R₁, R₂, R₃, R₄) は、この住居址に伴なう柱穴と考えられる。カマドは、桑のため上部を破壊されており、燃焼部と基底部が残っているのみである。燃焼部は浅く、0.05 m 程度であり、基底部は床を凹めて基底部としている。

下段の貼り床は、R₁ の東側で 0.90 m 南方向にかけて認められた周濠の一部と、西側外周濠とからなっている住居址と考えられ、東西径は 3.40 m である。この住居址に伴なうものは、R₁ とカマドの東側に接している貯蔵穴である。

壁は、カマド付近でわずかに認められるのみであり、上段の貼り床を伴なう住居址と関連すると判断される。壁は、斜めに立ち上がっており、共に周濠と接していたことと考えられる。また、R₁ と R₂ の間には桑による擾乱と思われる凹がある。

遺物は、貯蔵穴から須恵器片など 12 点の遺物が検出されたのみである。

第 8 号 住 居 址

(省 略)

第 1 号 土 括

この遺構は、第1号住居址の北西コーナーに接し、調査区北壁にかけて確認された遺構であるが、北半分は調査区域外のため正確な所は不明である。確認された範囲では、長径3.80m、短径1.00m、深さ0.20mあり、N-0°Eに主軸を有するようである。底には、4本のpitを有しており、平坦である。壁は、南壁がほぼ垂直に立ち上がっているが、他の壁は斜めに立ち上がっている。

P₁は、長径0.54m、短径0.20m、深さ0.25mあり、不整橢円形状を呈している。底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。P₂は、長径0.09m、短径0.08m、深さ0.18mあり、橢円形状を呈している。底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。P₃は、長径0.16m、短径0.10m、深さ0.15mあり、隅丸長方形形状を呈している。底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。

土層は、焼土粒子を含む暗褐色土が上塙内全域に堆積している。また、遺物は土師器の杯が検出された。

第 2 号 土 括

この遺構は、第7号住居址の東方約2Kの台地上平坦部において確認され、AとBとかなる第2号土壙である。AとBとは、約1m程度離れているが、耕作により土壤上面の一部が破壊されたため、分離して確認された遺構である。AとBとを併せると、長径1.75m（Aが1.30m、Bが0.45m）、短径はAが0.55m、Bが0.30mあり、深さはAの東側0.25m西側0.28mあり、Bは0.10mあり、N-22°Wに主軸を有し、不整梢円形を呈している。底は共に皿状をなし、壁はなだらかに立ち上がっている。

土層は、壙底にローム粒子を含む黒色土があり、この上にローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。遺物は、検出されなかった。

第 3 号 土 括

この遺構は、第 6 号構の北東の台地上平坦部で第 1 調査地点北壁に接して確認され、長径 2.00m、短径 1.33m、深さ 0.33m あり、円形状を呈する第 3 号土壙である。主軸は、N - 0° - E にあるようである。底は皿状を呈し、壁はなだらかに立ち上がっている。また、土壙の東側には、長径 0.14m、短径 0.14m、深さ 0.41m あり、隅丸方形形状を呈する小 pit がある。底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。

土層は、壙底部に焼土域（4 層）、これを挟むように暗褐色土（3 層）があり、この上に黒褐色土（2 層）とローム粒子を含む明褐色土（1 層）、が堆積している。4 層焼土域下層の壙底は、焼けておらず流入の焼土のようである。

遺物は、縄文式土器片、丸石、などが検出された。土器は、全て小破片である。

第 4 号 土 拡

この遺構は、第3号土壇の東方約1mの台地上平坦部でA地区の北壁に接して確認された。長径21.4m、短径14.8m、深さ0.45mあり、不整橢円形状を呈する第4号土壇である。N-Eに主軸を有していると思われる。底は、中央部が高くなっている(0.42m)、壁の立ち上がる部分が低く東側で0.55mあり、西側で0.50mである。壁は、斜めに立ち上がっている。また南東壁には、長径0.28m、短径0.25m、深さ0.35mあり、隅丸形状を呈するpitがある。底は皿状であり、壁はなだらかに立ち上がっている。

土層は、土壇中央部に黒褐色土(2層)、壁に沿って暗褐色土(3層)、そして明褐色土(1層)、が堆積している。土層の堆積状況は、第3号土壇と類似している。

遺物は、縄文式土器の小破片が検出された。

第 5 号 土 拡

この遺構は、第2号住居址の東方の台地上平坦部で第1調査地点の南壁に接して確認された、第5号土壙である。土壙の周囲には平坦部があり、これをめぐって周濠が確認された。中央部に位置する土壙は、長径 2.50m、短径 1.00m、深さ 0.15m あり、N-59°-W に主軸を有し、椭円形状を呈している。壙底には、3本の pit があるが底は平坦であり壁は、なだらかに立ち上がっている。P₁は、長径と短径が 0.18m、深さ 0.10m あり、円形を呈している。底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。P₂は長径 0.37m、短径 0.23m、深さ 0.08m あり、不整長方形状を呈している。底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっていいる。

この中央土壙の周囲にあたる周濠は、幅は東側で 0.53m、西側で 0.60m あり、深さは東側で 0.25m、西側で 0.18m ある。東側周濠から西側周濠までが 0.18m ある。東側周濠から西側周濠までが 4.30m あるが、北側周濠部が擾乱のため不明であるものの、推定約 2.50m 程度と判断される。周濠の底は皿状を呈しており、壁は斜めに立ち上がっている。また、周濠内には黒色土が堆積しており、中央土壙内には黄褐色土が堆積している。遺物は、縄文式土器片が検出された。

第 6 号 土 括

この遺構は、1 G 21 9 の南側の台地上平坦部において確認され、長径 1.15 m、短径 0.35 m、深さ 0.27 m あり、N - 0° - E に主軸を有し不整円形形状を呈している。南側に不整円形形状を呈する pit がある。長径 0.65 m、短径 0.24 m、深さ 0.39 m あり、底は皿状をなし、北壁は、なだらかに立ち上がっているが、東壁、西壁、南壁では斜めに立ち上がっている。

土層は、pit 内と擴底部に黒色土があり、この上にローム粒子を含む暗褐色土が堆積している。また、遺物は検出されなかった。



第 7 号 土 括

この遺構は、1G22gと2G22gとの間において確認され、長径 21.6m、短径 14.0m、深さ 0.15m あり、N-54°Wに主軸を有し、不整橢円形状を呈している。底は皿状をなししており、壁は、なだらかに立ち上がっている。墳底に 3 本の pit と東壁部に 1 本の pit、の合計 4 本の pit を含んでいる。

P₁は、長径と短径が 0.58m、深さ 0.43m あり、不整橢円形状を呈している。底は皿状を呈しており、壁は斜めに立ち上がっている。P₂は、長径 0.23m、短径 0.22m、深さ 0.35m あり、隅丸方形状を呈している。底は平坦であり、南壁は斜めに立ち上がっているが、東壁、西壁、北壁、ほぼ垂直に立ち上がっている。P₃は、長径 0.18m、短径 0.14m、深さ 0.32m あり、隅丸長方形状を呈している。底は平坦であり、東壁がほぼ垂直に立ち上がっているのみで、他の壁は斜めに立ち上がっている。P₄は、土壤上面より堀り込まれており、長径 0.60m、短径 0.50m、深さ 0.45m あり不整橢円形状を呈している。また、深さ 0.25m の所に段を有している。底は平坦であり、壁は全体的に斜めに立ち上がっている。

土層は、pit 内と墳底部に黒色土があり、この上に暗褐色土が堆積している。遺物としては、縄文式土器片、土師器片、などが検出された。

第 8 号 土 括

この遺構は、第7号土壙の西方において確認され、長径 1.18m、短径 0.58m、深さ 0.22m あり、N-33°-W に主軸を有し、不整椭円形状を呈する第8号土壙である。北壁部には pit を有している。底は、凸凹があり波状を呈しており、壁は斜めに立ち上がっている。

pit は、長径 0.22m、短径 0.19m、深さは 0.22m あり、椭円形をなしている。底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。

土層は、pit 内に暗褐色土、土壙内に明褐色土が堆積している。また、土層の堆積状況から pit は、土壙の後に掘られた状況を示している。

遺物としては、縄文式土器片、土師器片、などが検出された。

第 9 号 土 拡

この遺構は、1 G 20 g の北端で A 地区の北壁に接して確認され、長径 1.65 m、短径 0.72 m、深さ 0.20 m あり、N-53°-W に主軸を有し、不整椭円形状を呈している。底には 2 本の pit を有している。底は皿状を呈しており、壁は斜めに立ち上がっている。

P₁ は、長径 0.46 m、短径 0.26 m、深さ 0.25 m あり、不整椭円形状を呈している。P₂ は、長径 0.33 m、短径 0.26 m、深さ 0.25 m あり、不整椭円形状を呈している。底は共に平坦であり、壁も共にはば垂直に立ち上がっている。

土層は、pit 内と壇底部に黒色土があり、この上にローム粒子を含む暗褐色土と明褐色土が堆積している。なお、遺物は検出されなかった。

第 10 号 土 括

この遺構は、第6号住居址の北壁に接して確認され、長径1.50m、短径1.03m、深さ0.20mあり、N-64°-Eに主軸を有し、隅丸長方形状を呈する第10号土壙である。壙底に2本のpitを含んでいる。壙底は、皿状をなしており、北壁、東壁、西壁は斜めに立ち上がっているが、南壁はほぼ垂直に立ち上がっている。P₁は、長径0.19m、短径0.17m、深さ0.28mあり、椭円形をなしている。底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。P₂は長径0.25m、短径0.15m、深さ0.22mあり、椭円形をなしている。底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。

土層は、暗褐色土がpit内と土壙内に堆積しており、遺物は検出されなかった。

第 11 号 土 括

この遺構は、第6号住居址カマドの西側において確認され、長径128m、短径0.55m、深さ0.15mあり、N-73°-Wに主軸を有し、不整椭円形状を呈する第11号土壙である。底は凸凹が著しいが皿状を呈しており、南東壁は、なだらかに立ち上がっているが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

土層は、硬質の黒色土が堆積しており、遺物は土師器小破片が検出された。

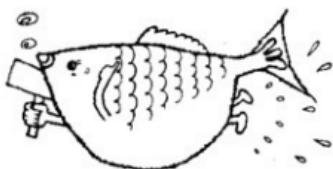
第 12 号 土 括

(省 略)

第 13 号 土 括

この遺構は、B地区（貝塚）の南西部において確認され、長径 2.70m、短径 1.78m、深さ 0.20m あり、N-23°-E に主軸を有し、長方形をなしている。底は平坦であり、壁は斜めに立ち上がっている。また、墳底の南西部には長径 1.12m、短径 0.54m、深さ 0.50m ある、橢円形をなす小土壙がある。底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。

遺物としては、縄文式土器小破片が検出された。



第 14 号 土 拡

この遺構は、B地区の15G 8 g, 9 gと16G 8 g, 9 gにおいて確認され、長径450m, 短径280m, 深さ0.38mあり、N-0°-Eに主軸を有し、不整長方形形状を呈する第14号土壙である。底は皿状をなし、壁は斜めに立ち上がっている。底はしっかりしているが、壁は軟質である。また、北東コーナーと西壁にはpitを有している。

P₁は、長径1.20m, 短径0.84m, 深さ0.38mあり、不整梢円形を呈している。底は皿状をなし、壁はなだらかに立ち上がっている。P₂は、長径0.34m, 短径0.30m, 深さ0.25mあり、梢円形をなしている。底は平坦であり、東壁と西壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、北壁と南壁は斜めに立ち上がっている。

土層は、壙底に暗褐色土があり、この土に明褐色土が堆積している。遺物では、6点の土師器完型品が検出された。内容は、甕2点と壺4点である。

第3調査地点（供養塚と板碑）

第3調査地点は第1調査地点の南方の台地上の尾根部分で、本遺跡を有する地区の中央部に位置し、校庭となる部分で、高さ0.30mの小さな塚を中心とした地区である。

この塚は、かつて「背の高さ位の高さがあり、広さも4坪ほどあって鉢田街道の脇にあった」ということである。昭和初期の不況時に鉢田街道を丘陵鞍部の切り通しとして付け替えたのである。第2次大戦後ブルドーザーで削平して畑を拓いたということである。現況は底径0.70m、高さ0.30mあり、不整梢円形状を呈している。主軸は、N-3°-Eにある。この塚は北東部に石が露出していた。

調査の結果、この塚は単独で存在しており塚の周囲から周濠と思われる遺構は確認されなかった。また、土層は明褐色土の一層のみであり、露出していた石は、粘板岩製の板碑である。この、板碑以外の遺物は検出されなかった。塚の周囲に周濠も認められず、また、板碑以外の遺物は検出されなかつたため、この塚は供養塚といえる。また、塚の下方からは土壤も確認されなかつたため、板碑と塚との関係に問題が生じる。板碑の出土状況は、塚の内部から寝かされた状況で検出されており、板碑直下にも遺物と遺構は検出されなかつた。板碑は、死者の供養か自己の追善供養のために造立されたものであり、塚を伴なう場合は塚上に造立されたようであり、土壤内から出土した場合は人骨を伴なっている場合が多いようである。しかし、今回は前述のとおり、板碑直下や塚下方に遺構と遺物は確認されなかつた。したがつて、この塚は板碑を造立するために造られた塚とは考えられず、板碑そのものを供養するために造られた塚と考えられる。よつて、その時期は中世ではなく、近世のように考えられる。

塚周囲では、南北方向にGをT状に設定し調査を行なつたが、何も確認されなかつた。また、東西方向にもGをT状に設定し調査したところ、西端部から住居址と思われる落ち込みが確認された。また、南東部に設定したGからは、その中央部と南東部から住居址と思われる落ち込みが2ヶ所確認された。よつて、塚の周囲からは、住居址と思われる遺構が3ヶ所確認された。

この地区からの出土遺物は、塚の内部から検出された板碑と、住居址と思われる遺構から検出された土師器壺完型品、のみである。

なお、この地区は、塚の調査を中心とした遺構確認調査のみである。調査後は約1mの

盛土をして永久保存をはかった。

板 碑

(第15図)

この板碑は、第3地点の塚より板碑表面を下に向けて発見された。最大長60.0cm、上幅64.8cm、下幅50.0cm、厚さ5.0cmあり、粘板岩を使用し、との双式板碑であり、無紀年碑である。板碑拓影のように、比較的摩滅が著しい。

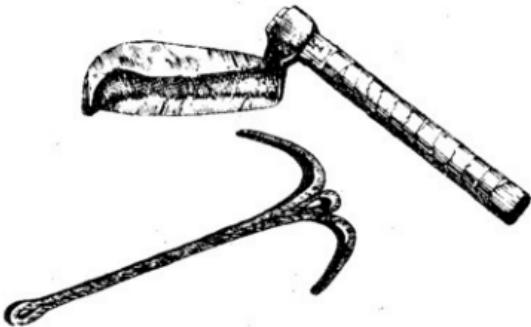
板碑には、幅1分程度の線で頭部三角形を刻んでいるが、中央付近で三角の線は接続しており、2つの三角を形成しているが、三角形底辺の線とは、中央付近では接続しておらず分離しており、佛種、年号、偈などを刻する部分は線で区画されているが、頭部三角形とは接続していない。側の外線は、頭部三角形と接続しているようだが、側の外線は接続していない。また、二条線は認められず、頭部三角形の底辺と・を有する部の上線とて、二条線を表現しているようである。

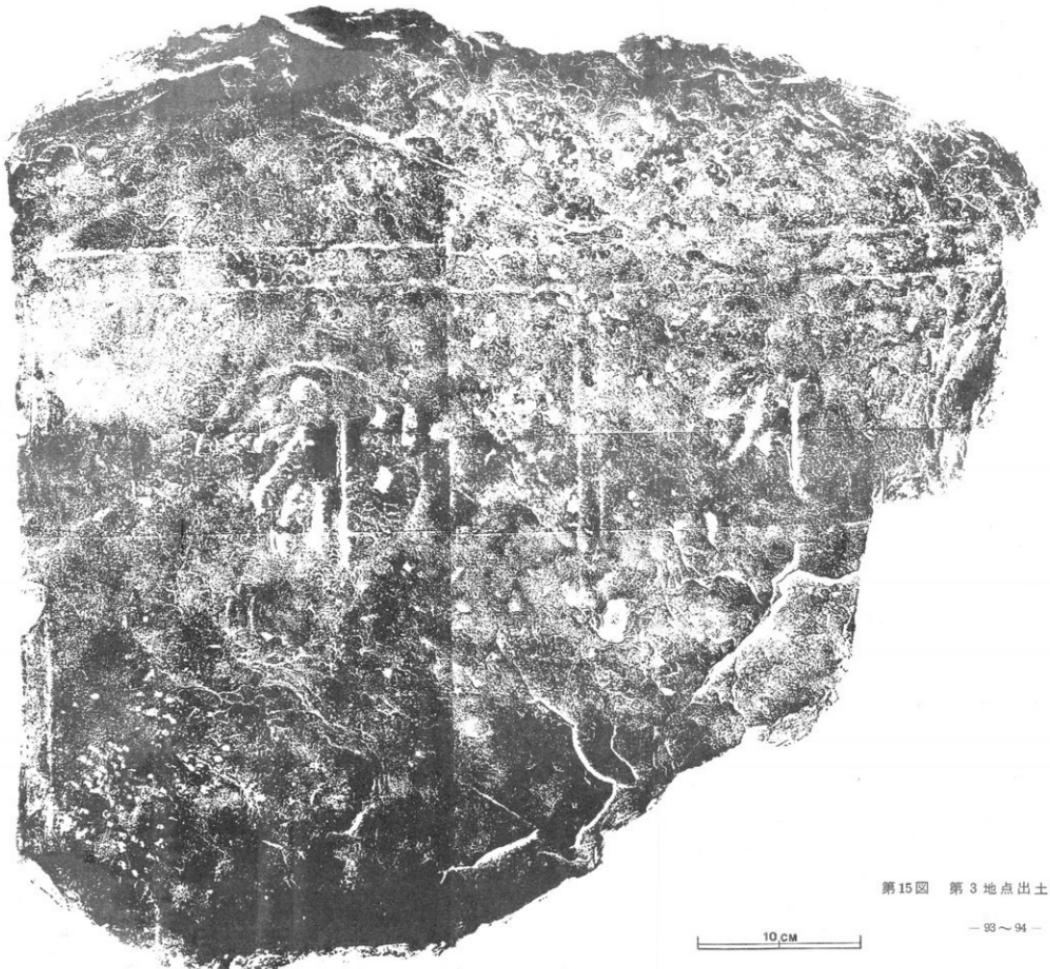
以上の点から、この板碑は簡略化されているといえる。

佛種子は、左がで右がであり、各々円内に刻まれている。薬剣堀りであるが、全体的に丸味を持ち堀りも浅く、佛種子の形などから室町期と判断される。

板碑と塚との関係であるが、板碑は以上のように室町期と判断されるが、塚は土地の人によると戦前まで高さ約1.50m、幅約2.80mあったといい、塚の上に石祠があり「石堂様」と呼んだという。戦後の開墾により、現在の塚が出現したのである。板碑が塚上にあったか、塚内にあったか不明であるが、石祠と併せ考えるならば、板碑は石祠の近くに立っていたのではないか。開墾と同時に石祠は行方不明となり、板碑には梵字が刻まれていたため、供養のために塚内に埋めたのではないか、塚は、開墾により破壊されたが、その時塚内より遺物は出土しなかったといい、今回調査した塚からも板碑以外は検出されなかった。また、塚は鉢田街道に面していたという。したがって、塚は近世の塚と考えられる。これは、板碑の出土状況が示している。つまり、板碑が裏返しで寝かされていたこ

と、板碑の下からも塚内からも遺物は検出されなかつたこと、板碑の下から遺構は確認されなかつたこと、などから板碑は室町期であり、塚は近世と考えられる。

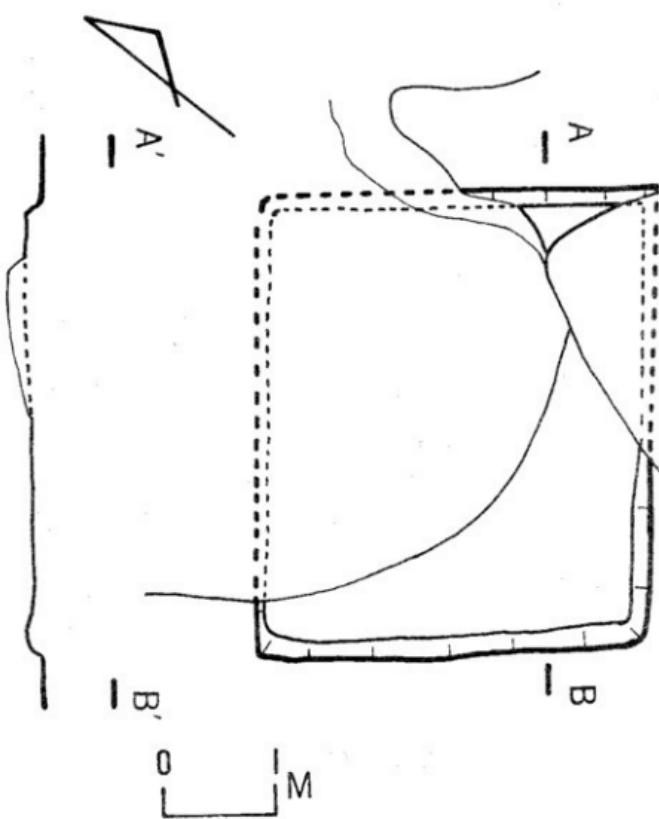




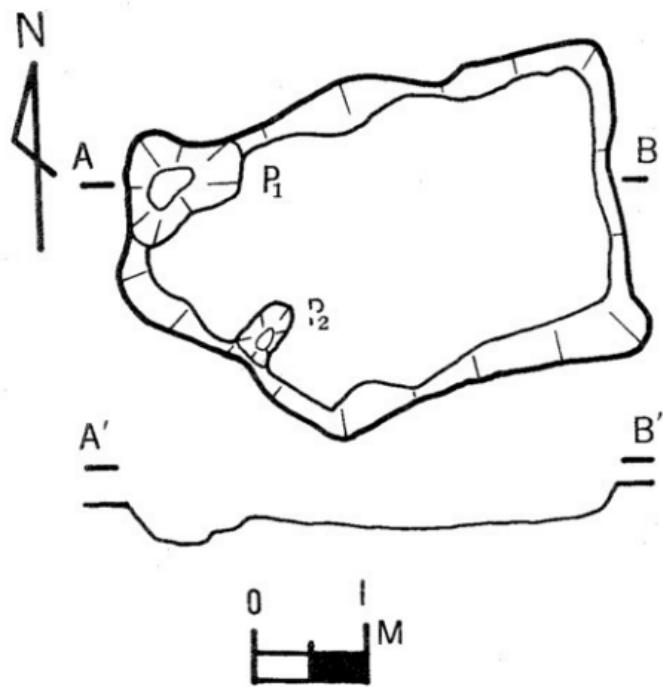
第15図 第3地点出土板碑拓影

10 CM

- 93 ~ 94 -



第19図 第8号住居址実測図



第20図 第9号住居址実測図

小牧石堂遺跡発掘調査
報告書

昭和 53 年 3 月 発行

編集者 丸子 亘

発行者 小牧石堂遺跡発掘
調査会